特221
650

特221
650

帝國圖書館藏

校註者 山崎麓
校註 徒然

草全

東京 國民圖書株式會社

昭和10年 帝國圖書館藏

はしがき

一、本書は主として高等學校竝に專門學校の教科書にあてる目的で編纂しましたが、中等學校程度の上級用又は補習科用としても便宜かと思ひます。

一、流布本徒然草文段抄を底本としました。章を分つ事などは勿論原本には無いと思ひますが、流布本に依つて國民は徒然草を愛讀したものであり、各段に番號を附する事が索引の代りにもなり授業上便宜と考へられたからであります。

一、授業の際適宜に取捨されるやうに、完本にしました。之は教師の意見趣味に依つて自由に採擇が出來る爲と、教科書としてでなく國文學中の一作品として讀む人ある事を豫想したからであります。

一、頭註は、野槌、文段抄、大全、直解等を初めとし、現代迄の諸註釋書を參酌しました。可なり多くの頭註を入れたのは、故事出典等は學生の自修に任せ一文の内容方面に教師の力が注がれ、そして課程が進行するやうにと考へたのであります。通常一週二時間の課程では、百四十段内外しか進行しませんから、此の點をも考慮に入れたのであります。

一、本文にない、假名を漢字にあてたり、詞に「」を附けたり、讀者に讀み易い樣にしました。

○つれ〴〵なるまゝに　退屈なので。
○日ぐらし　終日。
○よしなしごと　つまらぬ事、ちちもない事。
○そこはかとなく　とりとめもなく。
○怪しうこそ物狂ほしけれ　妙に變な氣持がする。

○竹の園生　皇族。
○やんごとなき　特に貴い。
○一の人　摂政関白。
○舎人　朝廷より許された護衛隨身。
○ゆゝし　すてきである。
○はふれにたれど　零落したけれども。

徒然草

〔一〕つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯に向ひて、心に移り行くよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、怪しうこそ物狂ほしけれ。

いでや、この世に生れては、願はしかるべきことこそ多かめれ。帝の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまはさらなり、唯人も、舎人などたまはる際は、ゆゝしと見ゆ。その子、孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つ方は、ほどにつけつゝ、時に逢ひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いと口惜し。法師ばかり羨しからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるゝよ。」と、清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛にのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。増賀聖のいひけむやうに、名聞ぐるしく、佛の御教に違ふらむとぞ覺ゆる。ひたぶるの世すて人は、なか〴〵あらまほしき方もありなむ。人はかたち有樣の勝れたらむこそ、あらまほしかるべけれ。物うち言ひたる、聞きに

○かけずけおさるゝ　わけもなく煩倒される。
○まことしき文の道　眞實な學問、修身齊家の道。
○有職　朝廷武家などの典禮に通ずる事
○公事のかた　朝廷の政事儀式の方面。
○いたましうするものから　酒をすゝめられて恐縮したやうにはして居るものの
○きよら　華麗。
○九條殿　右大臣藤原師輔、忠平の子。
○禁中の事ども　期龜院の御著禁祕抄。
○いとさうぐしく　寂しく慢らず。
○合ふさ離るさ　一方よければ一方うまくゆかぬこと。

くからず、愛敬ありて、詞多からぬこそ、飽かず對はまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ本性見えむこそ、口をしかるべけれ。人品容貌こそ生れつきたらめ、心はなどか、賢きより賢きにも、うつさば移らざらむ。かたち心ざまよき人も、才なくなりぬれば、人品くだり、顏憎さけなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるゝこそ、本意なきわざなれ。ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人の鑑ならむこそいみじかるべけれ。手など拙からずはしりがき、聲をかしくて拍子とり、いたましうするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。

〔一一〕　いにしへの聖の御代の政をも忘れ、民の憂へ、國のそこなはるゝをも知らず、萬にきよらを盡して、いみじと思ひ、所狹きさましたる人こそ、うたて、思ふところなく見ゆれ。「衣冠より馬車に至るまで、あるに隨ひてもちひよ。美麗を求むることなかれ。」とぞ九條殿の遺誡にもはべる。順德院の、禁中の事ども書かせ給へるにも、「おほやけの奉物はおろそかなるをもてよしとす。」とこそ侍れ。

〔一二〕　よろづにいみじくとも、色好まざらむ男は、いとさうぐしく、玉の巵の底なき心地ぞすべき。露霜にしほたれて、所さだめず惑ひ歩き、親のいさめ、世のそしりをつゝ

○たやすからず　與し易くなく。
○ふつゝかに　拙乏に、淺薄に。
○顯基中納言　源顯基、大納言俊賢の子。
○配所　流罪の地。
○蔵中書王　中書は中務卿の唐の官名、後醍醐帝の皇子。
○九條太政大臣　藤原伊通、宗通の子。
○花園左大臣　源有仁、輔仁親王の子。
○染殿大臣　藤原良房、冬嗣の子。
○末の後れ給へる　子孫の劣れる。
○あだし野　山城愛宕山の麓にある野。
○鳥部山　山城愛宕郡清水寺附近の墓地

むに、心のいとまなく、合ふさ離るさに思ひ亂れ、さるは獨り寢がちに、まどろむ夜なきこそ、をかしけれ。さりとて一向たはれたる方にはあらで、女にたやすからずおもはれむこそ、あらまほしかるべき業なれ。

〔一四〕　後の世のこと心に忘れず、佛の道うとからぬ、心にくし。

〔一五〕　不幸に愛へに沈める人の、頭おろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、有るか無きかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。顯基中納言のいひけむ、「配所の月、罪なくて見む。」こと、さもおぼえぬべし。

〔一六〕　我が身のやんごとなからむにも、まして數ならざらむにも、子といふもの無くてありなむ。前中書王、九條太政大臣、花園左大臣、皆族絶えむ事を願ひ給へり。染殿大臣も子孫おはせぬぞよく侍る。末の後れ給へるは、わろき事なりとぞ、世繼の翁の物語にはいへる。聖德太子の御墓を、かねて築かせ給ひける時も、「こゝをきれ、かしこを斷て。子孫あらせじと思ふなり。」と侍りけるとかや。

〔一七〕　あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住み果つる習ひならば、いかに物の哀れもなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり

○かけろふ　淮南子に「蜉蝣朝生而夕死、而魂氣其樂。」
○命長ければ恥おほし　荘子に「壽則多辱」
○あらまし　豫期する。
○えならぬ　何ともいはれぬ。
○心ときめきす　心のをどる。
○久米の仙人　和泉国菟上郡の人。
○人の程　人柄。
○うちあるさま　ただ一すじの様子。
○女のうちとけたるいもねず　女は氣を許して熟睡もせぬ。たしなみが深い故である。

久しきはなし。かけろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮らす程だにも、こよなうのどけしや。飽かず惜しとおもはば、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。住みはてぬ世に、醜きすがたを待ちえて、何かはせむ。命長ければ恥おほし。長くとも四十に足らぬほどにて死なむこそ、目安かるべけれ。そのほど過ぎぬれば、かたちを愧づる心もなく、人にいでまじらはむ事を思ひ、夕の日に子孫を愛し、榮行く末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、物のあはれも知らずなり行くなむあさましき。

〔八〕　世の人の心を惑はすこと色欲には如かず。人の心は愚かなるものかな。匂ひなどは假のものなるに、しばらく衣裳に薫物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心ときめきするものなり。久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て、通を失ひけむは、まことに手足膚などのきよらに、肥え膏づきたらむは、外の色ならねばさもあらむかし。

〔九〕　女は髪のめでたからむこそ、人のめだつべかめれ。人の程、心ばへなどは、物うち言ひたるけはひにこそ、物ごしにも知らるれ。事に觸れてうちあるさまにも、人の心を惑はし、すべて女のうちとけたる、いもねず、身を惜しとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬ

○六塵　六つの心をけがす刺激、色聲香味、觸、法（意）の事。
○樂欲　心を樂しましむる欲。
○かの惑ひ　色欲。
○女の髪筋　大威德陀羅尼經に「以ニ女人髮一爲ル作ニ綢繆一香象調服況丈夫耶。」
○つきづきしく　似あはしく。
○簀子　縁側。
○透垣　竹をすかして編んだ垣。
○たよりをかしく　作り工合に趣あつて
○前栽　庭。
○後徳大寺　藤原實定。公卿の子。
○寢殿　貴族の邸宅の中心にして主人の住む建物。

業にもよく堪へ忍ぶは、たゞ色を思ふがゆゑなり。まことに愛著の道、その根深く源遠し。六塵の樂欲多しといへども、皆厭離しつべし。その中に、たゞかの惑ひのひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、變る所なしとぞ見ゆる。されば女の髪筋を縒れる綱には、大象もよくつながれ、女のはける足駄にて造れる笛には、秋の鹿必ず寄るとぞいひ傳へ侍る。自ら戒めて、恐るべく慎むべきはこの惑ひなり。

〔十〕　家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど、興あるものなれ。よき人の長閑に住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一際しみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心ある樣に、簀子透垣のたよりをかしく、うちある調度も、むかし覺えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。多くの工匠の、心を盡して磨きたて、唐の日本の、珍しくえならぬ調度ども竝べおき、前栽の草木まで、心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは存へ住むべき、また時の間の煙ともなりなむとぞ、うち見るよりも思はるゝ。大かたは、家居にこそ事ざまは推しはかられ。後徳大寺の大臣の、寢殿に鳶ゐさせじとて繩を張られたりけるを、西行が見て、「鳶の居たらむ何かは苦しかるべき。この殿の御心さば

○後小路の宮　後山帝の皇子、性覚法親王。
○神無月　十月。
○栗栖野　山城國宇治郡醍醐附近。
○つゆおとなふもの　なし　笑の雫の露と少しもの意をかけた
○閼伽棚　閼伽は梵語、水の義、佛に手向ける水を供へる器を載く棚。
○ことさめ　興醒め
○世のはかなき事　世間のつまらぬ事
○うらなく　腹藏なく。
○つゆ違はざらむと　少しでも調子の合はぬ事がないやうにと。
○さるからさぞ　さうだからさうだ。

かりにこそ。」とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、彼のためし思ひ出でられ侍りしに、「まことや、鳥のむれゐて池の蛙をとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなむ。」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。後徳大寺にも、いかなるゆゑか侍りけむ。

〔十一〕　神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝ笑の雫ならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に、菊紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくても在られけるよと、あはれに見る程に、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりを嚴しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

〔十二〕　同じ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしき事も世のはかなき事も、うらなくいひ慰まむこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらむと向ひ居たらむは、ひとりある心地やせむ。互にいはむほどのことをば、けにと聞くかひあるものから、いさゝか違ふ所もあらむ人こそ、「我は然やは思ふ。」など爭ひにくみ、「さるからさぞ。」

○文選　支那梁武帝の子昭明太子の編した詩文集、三十卷。
○白氏文集　唐白樂天の詩文集。
○南華の篇　莊周の著はした書名、所謂莊子。
○臥猪の床　猪は枯草を集めて寢床とする事が傳へられる。
○絲による　絲によるものならなくに別路の心細くもおもほゆるかな（古今集）。
○ものとはなしに　絶角の巻に前の歌をかく改めて出してある。
○のこる松さへ　冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峯にさびしき。祝都城仲の歌。

ともうち語らはば、つれ〴〵慰まめと思へど、けには少しかこつかたも、我とひとしからざらむ人は、大かたのよしなしごといはむ程こそあらめ、まめやかの心の友には遙かにへだたる所のありぬべきぞわびしきや。

〔十三〕　ひとり燈火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こよなう慰むわざなれ。文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなる事多かり。

〔十四〕　和歌こそなほをかしきものなれ。あやしの賤山がつの所作も、いひ出づれば面白く、恐ろしき猪も、臥猪の床といへばやさしくなりぬ。この頃の歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、言葉の外に哀れにけしき覺ゆるはなし。貫之が、「絲による物ならなくに。」といへるは、古今集の中の歌屑とかやいひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えず。その世の歌には、すがたことば、この類のみ多し。この歌に限りて、かくいひ立てられたるも知りがたし。源氏物語には、「ものとはなしに。」とぞ書ける。新古今には、「のこる松さへ峯にさびしき。」といへる歌をぞいふなるは、誠に少しくだけたるすがたにもや見ゆらむ。されどこの歌も、

○家長　源家長、時長の子。
○いさや　さあどうだかと打消す意。
○梁塵秘抄　後白河帝の御編著、主として今様を集めたもの
○郢曲　當時のうたひ物の總稱。
○篳篥　笛に似て竪に吹く雅樂の樂器。
○和琴　やまと琴とも云ふ。六絃の琴。
○心の濁り　心の欲情、煩惱。

衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にもことさらに感じおほせ下されけるよし、家長が日記には書けり。歌の道のみいにしへに變らぬなどいふ事もあれど、いさや、今もよみあへる、同じことば歌枕も、むかしの人のよめるは、更におなじものにあらず。やすくすなほにして、すがたも清けに、あはれも深く見ゆ、梁塵秘抄の郢曲のことばこそ、またあはれなる事はおほかめれ。むかしの人は、いかにいひ捨てたる言種も、皆いみじく聞ゆるにや。

〔十五〕　いづくにもあれ、暫し旅立ちたるこそ、目さむる心地すれ。そのわたり、こゝかしこ見ありき、田舍びたる所、山里などは、いと目馴れぬことのみぞ多かる。都へたよりもとめて文やる。「その事かの事、便宜にわすれな。」などいひやることをかしけれ。さやうの所にてこそ、萬に心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人も、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社などに忍びてこもりたるもをかし。

〔十六〕　神樂こそなまめかしく面白けれ。大かに物の音には笛篳篥、常に聞きたきは琵琶和琴。

〔十七〕　山寺にかきこもりて、佛に仕うまつるこそ、つれ〴〵もなく、心の濁りもきよまる心地すれ。

○許由　帝堯時代の人、天下を讓らうと云はれ、穎らはしい事を聞いたと云ふので潁川で耳を洗つた
○なりひさご　瓢。
○孫晨　字は元公、家貧しくむしろを織つて暮らす、後榮達し京兆の功曹となる
○これらの人　日本の人を意味する。
○飽るものにて　一應尤もな事で。
○花橘云々　花橘は昔を追懷せしむると云ふ聯想があつた。「五月待つ花橘の香をかぐは昔の人の袖の香ぞする」（在原業平）

〔十八〕　人はおのれをつゝまやかにし、驕りを退けて財を有たず、世を貪らざらむぞいみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり。唐土に許由といひつる人は、更に身に隨へる貯へもなくて、水をも手してさゝげて飲みけるを見て、なりひさごといふ物を、人の得させたりければ、ある時木の枝にかけたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて捨てつ。また手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり心の中すゞしかりけむ。孫晨は冬の月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれに臥し、朝にはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、しるしとゞめて世にも傳へけめ。これらの人は語りも傳ふべからず。

〔十九〕　折節のうつり變るこそ、物毎に哀れなれ。物の哀れは秋こそまされと、人毎にいふめれど、それも然るものにて、今一きは心もうきたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日かけに、垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春ふかく霞みわたりて、花もやう〳〵氣色だつほどこそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、萬に唯心をのみぞなやます。花

○おほつかなき　驚の花のなよ〳〵したのを心もとないと形容したのである。
○灌佛　四月八日に行はる、佛生會、釋迦の誕生日でその像に香水を灌ぐ式がある。
○祭のころ　陰暦四月中の酉の日にある賀茂の祭禮。
○あやめ葺くころ　五月の端午の節句に屋根軒に菖蒲をふく
○早苗さる　稻の苗を田に移し植ゑる。
○たゝく　水鶏の啼聲は人が戸を叩く音に似て居るのでかく云ふ。
○七夕祭　七月七日牽牛織女二星を祭り技藝の上達を祈る。

橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹のきよげに、藤のおほつかなき樣したる、すべて思ひすて難きことおほし。

灌佛のころ、祭のころ、若葉の梢すゞしけに繁りゆくほどこそ、世のあはれも人の戀しさもまされと、人のおほせられしこそ、實にさるものなれ。五月、あやめ葺くころ、早苗とるころ、水鶏のたゝくなど、心ほそからぬかは。六月の頃あやしき家に、夕顏の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、鴈なきて來る頃、萩の下葉色づくほど、早稻田刈りほすなど、とり集めたることは秋のみぞおほかる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草紙などに事ふりにたれど、おなじ事また今更にいはじとにもあらず。おほしき事云はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉のちりとゞまりて、霜いと白う置ける朝、遣水より煙のたつこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ほそきものなれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとり重ねて、催し行はるゝ樣ぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。晦日の夜いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門叩き走りありきて、何事にかあらむ、ことゞ〳〵しくのゝしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人のくる夜とて魂まつるわざは、このごろ都には無きを、東の方には猶することにてありしこそ、あはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、ひきかへ珍しき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしけなるこそ、また哀れなれ。

〔二十〕　某とかやいひし世すて人の、「この世のほだしもたらぬ身に、たゞ空のなごりのみぞ惜しき。」といひしこそ、まことにさも覺えぬべけれ。

〔二十一〕　萬の事は、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、「月ばかり面白きものは有らじ。」といひしに、またひとり、「露こそあはれなれ。」と爭ひしこそをかしけれ。折にふれば何かはあはれならざらむ。月花はさらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲

○御佛名　十二月十九日から三日間潰涼殿で行はれる佛事。
○荷前の使　朝廷で諸國から奉つた貢の初穗を帝陵、外戚の墓へ獻上ある使、十二月十三日以後。
○追儺　鬼やらひ、十二月晦日。
○四方拜　元旦、天皇宮中で天地四方を拜せられる儀式。
○魂まつる　昔は十二月晦日にも魂祭をしたのである。
○ほだし　自分をしばる絆、妻子とか財産とかをさす。
○沅湘日夜云々　屈叔倫の詩「沅湘日夜東流去、不爲愁人一住少時」。

○語論　竹林七賢の一人、彼の文に「遊二山澤一、觀二魚鳥一、心甚樂レ之」。
○主殿寮　宮内省内、供御燈燭の事及殿庭洒掃、燈燭庭燎などを掌る。
○人數だて　松明持つ役に用意をせよと命令する事。
○立明　松明。
○最勝講　五月吉日清涼殿で最勝王經を講ぜしめられる儀式
○廬　場所の名。
○高殿　宮中屋なき殿、舞などに用ゐる。
○朝餉　淸涼殿内、帝の御朝食を召す所
○高遣戸　こゝでは清涼殿坤の廊下の戸
○陣　禁中の警衛に諸衛の列坐する所。

にとゞまること少時もせず。」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も、「山澤にあそびて魚鳥を見れば心樂しぶ。」といへり。人遠く水草きよき所にさまよひ歩きたるばかり、心慰むことはあらじ。

〔二十二〕　何事も古き世のみぞ慕はしき。今樣は無下に卑しくこそなり行くめれ。かの木の道の匠のつくれる美しき器も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。文の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき。たゞいふ詞も、口惜しうこそなりもて行くなれ。古は、「車もたけよ。」「火掲けよ。」とこそいひしを、今やうの人は、「もてあけよ。」「かきあけよ。」といふ。主殿寮の「人數たて。」といふべきを、「立明し白くせよ。」といひ、最勝講の御聽聞所なるをば、「御講の廬。」とこそいふべきを、「講廬。」といふ、口をしとぞ、古き人の仰せられし。

〔二十三〕　衰へたる末の世とはいへど、猶九重の神さびたる有樣こそ、世づかずめでたきものなれ。露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじとも聞ゆべし、怪しの所にもありぬべき小蔀、小板敷、高遣戸なども、めでたくこそ聞ゆれ。「陣に夜の設けせよ。」といふこそいみじけれ。夜の御殿のをば、「搔燈疾うよ。」などいふ、まためでたし。上卿の、陣にて事行へる樣は更なり、諸司の下人どもの、したり顔になれたるもをかし。さばかり寒き終夜、

○齋宮　天子即位毎に處女の皇族を伊勢大神宮擧仕に遣はさるゝその居所、或はその人。
○野の宮　齋宮の伊勢へ出發前齋戒のため居られる所、賀茂神社へもあつた。
○中子　棒の總詞。
○染紙　經文の總詞。
○手野　山城葛野郡手野神社。
○三輪　大和三諸山三輪神社。
○大原野云々　曾山城愛宕郡。
○桃李云々　「桃李不レ言春爛漫」（菅原時文）
○京極殿法成寺　共に藤原道長の住みし所、後者はその晩年
○御堂殿　藤原道長

此處彼處に睡り居たるこそをかしけれ。「内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなり。」とぞ、徳大寺の太政大臣は仰せられける。

〔二十四〕　齋宮の野の宮におはします有樣こそ、やさしく面白き事の限りとは覺えしか。經佛など忌みて、中子、染紙などいふなるもをかし。すべて神の社こそ、捨て難くなまめかしきものなれや。ものふりたる森の景色もたゞならぬに、玉垣しわたして、榊に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。殊にをかしきは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮。

〔二十五〕　飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事去り、樂しび悲しび行きかひて、花やかなりし邊も、人すまぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李物いはねば、誰と共にか昔を語らむ。まして見ぬ古のやんごとなかりけむ跡のみぞいとはかなき。京極殿、法成寺など見るこそ、志留まり、事變じにける樣は哀れなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、莊園多く寄せられ、我が御族のみ、御門の御後見、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならむ世にも、かばかりあせ果てむとはおぼしてむや。大門金堂など近くまでありしかど、正和のころ南門は燒けぬ。金堂はその後たふれ伏したるま

○兼行　大和守藤原兼行、書の名手。
○白き絲　淮南子に「墨子見素絲而泣之。」
○道の衢　同書に「墨子見岐路而哭之。」
○むかし見し云々　藤原公實の詠歌。
○御國ゆづりの節會　天子御位を皇太子に讓らるゝ儀式。
○侍所、殿、内侍所　三種の神器、殿は玉、内侍所は鏡。
○新院　花園院。
○おりゐさせ給ひ　文保二年二月讓位
○伴のみやつこ　伴の御奴、主殿寮の下司で伴氏の者、「主殿の伴の御奴心あらは此の簪ゆかり朝霧めすな」の歌がある。

まにて、取りたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて殘りたる。丈六の佛九體、いと尊くて竝びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法花堂などもいまだ侍るめり。これも亦いつまでかあらむ。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから礎ばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば萬に見ざらむ世までを思ひ掟てむこそ、はかなかるべけれ。

〔二十六〕風も吹きあへず移ろふ人の心の花に、馴れにし年月をおもへば、あはれと聞きし言の葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になり行くならひこそ、亡き人の別れよりも勝りて悲しきものなれ。されば白き絲の染まむ事を悲しび、道の衢のわかれむ事を歎く人もありけむかし。堀河院の百首の歌の中に、

むかし見し妹が垣根は荒れにけり茅花まじりの菫のみして

さびしきけしき、さること侍りけむ。

〔二十七〕御國ゆづりの節會行はれて、劍、璽、内侍所わたし奉らるゝほどこそ、かぎりなう心ぼそけれ。新院のおりゐさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや。

殿守の伴のみやつこよそにしてはらはぬ庭に花ぞ散りしく

○諒闇　まことにくらしの義、天子の喪。
○倚廬　諒闇の時の喪御所、宮中に建つ。
○憲の御輦　平常の輦は竹なのである。
○布の帽額　帽額は簾につく飾りの布、それが鈍色を用ゐてあるのを特に布の帽額と稱す。
○平緒　太刀の下緒
○すさび　手慰み。
○具足　道具。
○中陰　死後の七々四十九日。
○後のわざ　死者の冥福を祈る法事など
○あかれぬ　離れた

今の世のことしげきにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞ寂しけなる。かゝるをりにぞ人の心もあらはれぬべき。

〔二十八〕諒闇の年ばかり哀れなる事はあらじ。倚廬の御所のさまなど、板敷をさけ、葦の御簾をかけて、布の帽額あら〳〵しく、御調度ども疎かに、みな人の裝束、太刀、平緒まで、異樣なるぞゆゝしき。

〔二十九〕靜かに思へば、よろづ過ぎにしかたの戀しさのみぞせむ方なき。人しづまりて後、永き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、殘し置かじと思ふ反古など破りすつる中に、なき人の、手習ひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。このごろある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくてかはらず久しき、いとかなし。

〔三十〕人の亡き跡ばかり悲しきはなし。中陰の程、山里などに移ろひて、便りあしく狹き所にあまたあひ居て、後のわざども營みあへる、心あわたゞし。日數の早く過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日はいと情なう、互にいふ事もなく、我かしこけに物ひきしたため、ちり〴〵に行きあかれぬ。もとの住家にかへりてぞ、さらに悲しきことは多かるべ

○しか〴〵の事云々　後に生きて居る人のため忌む意。
○去るものは日々に疎し　文選に「去者日已疎、來者日已新。」
○けうとき　人けのないさびしい。
○卒都婆　梵語、佛に供する五層の高き物、異せるは木材で製してある。
○荒にくだかれ云々　文選に「出ㇾ郭門直視、但見ㇾ丘與ㇾ墳、古墓犂爲ㇾ田、松柏摧爲ㇾ薪。」
○ひが〳〵し　ひがんで居る、偏を鄙せぬ。

き。しか〴〵の事はあなかしこ、跡のため忌むなる事ぞなどいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心はなほうたて覺ゆれ。年月經てもつゆ忘るゝにはあらねど、「去るものは日々に疎し。」といへる事なれば、さはいへど、その際ばかりは覺えぬにや、よしなし事いひてうちも笑ひぬ。骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、程なく卒都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ、言問ふよすがなりける。思ひ出でて忍ぶ人あらむほどこそあらめ。そも又ほどなくうせて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるは跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらむ人は哀れと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年を待たで薪にくだかれ、ふるき墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき。

〔三十一〕　雪の面白う降りたりし朝、人の許いふべき事ありて、文をやるとて、雪のことは何ともいはざりし返り事に、「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬ程の、ひが〳〵しからむ人の仰せらるゝ事、聞き入るべきかは、かへすゞ〳〵口惜しき御心なり。」といひたりしこそ、をかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

○匂ひ　たきものの匂ひ。
○妻戸　開方へあける戸。
○今少し　客の聞きし戸をもう少し。
○今の内裏　冷泉萬里小路の内裏。建武三年焼失後新造された内裏。
○女輝門院　伏見帝の母后、左大臣藤原實兼の女。
○閑院殿　御殿の名。藤原冬嗣の邸、後嵯峨居となつた。
○櫛形の穴　壁に櫛形の穴をつけて通路としたもの。
○甲香　香をたくに用ゐる器具の名。

〔三十二〕　九月二十日の頃、ある人に誘はれ奉りて、明くるまで月見歩く事侍りしに、思し出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しけきに、わざとならぬ匂ひしめやかにうち薫りて、忍びたるけはひ、いと物あはれなり。よきほどにて出で給ひぬれど、猶ことざまの優に覺えて、物のかくれよりしばし見居たるに、妻戸を今少しおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけ籠らましかば、口惜しからまし。あとまで見る人ありとは如何でか知らむ。かやうの事は、たゞ朝夕の心づかひによるべし。その人程なく亡せにけりと聞き侍りし。

〔三十三〕　今の内裏つくりいだされて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難なしとて、すでに遷幸の日近くなりけるに、女輝門院御覽じて、「閑院殿の櫛形の穴は、まろく緣もなくてぞありし。」と仰せられける、いみじかりけり。これは藥の入りて、木にて緣をしたりければ、誤りにて直されにけり。

〔三十四〕　甲香は、ほら貝の樣なるが、小さくて、口の程の細長にして出でたる貝の蓋なり。武藏の國金澤といふ浦にありしを、所の者は「へなたり。」と申し侍るとぞいひし。

〔三十五〕　手の悪き人の、憚らず文かきちらすはよし。見苦しとて人に書かするはうるさ

し。

〔二十六〕 久しく訪れぬ頃、いかばかり恨むらむと、我が意り思ひ知られて、言葉なき心地するに、女のかたより、「仕丁やある、一人。」なんどいひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。「さる心ざましたる人ぞよき。」と、人の申し侍りし、さもあるべきことなり。

〔二十七〕 朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時に、我に心をおき、ひきつくろへる樣に見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、猶けに〳〵しくよき人かなとぞ覺ゆる。疎き人のうちとけたる事などいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

〔二十八〕 名利に使はれて靜かなる暇なく、一生を苦しむるこそ愚かなれ。財多ければ身を守るにまどし。害を買ひ煩ひを招く媒なり。身の後には金をして北斗を支ふとも、人の爲にぞ煩はるべき。愚かなる人の目を喜ばしむる樂しび、又あぢきなし。大きなる車、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらむ人はうたて愚かなりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵になげべし。利に惑ふは、すぐれて愚かなる人なり。埋もれぬ名をながき世に殘さむこそあらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、勝れたる人とやはいふべき。愚かに拙き人も、家に生れ時にあへば、高き位にのぼり、驕りを極むるもあり。いみじかし。

○仕丁　下僕。
○心をおき　隔てる樣にする、遠慮を見せる。
○ひに〳〵しく　尤もらしく（同感の心持）
○疎き人　親しくない人。
○金をして云々　北斗は北斗星、白氏文集に「身後推レ金柱ニ北斗一、不レ如生前一盃酒ニ。」
○金は山に云々　文選に「捐ニ金於山一、沉ニ珠於淵一」又莊子に「藏ニ金於山一、藏ニ珠於淵一。」

りし賢人聖人、みづから卑しき位にをり、時に遇はずして止みぬる、また多し。偏に高き官位を望むも、次におろかなり。智惠と心とこそ、世に勝れたる譽も殘さまほしきを、つら〳〵思へば、譽を愛するは人の聞きを喜ぶなり。譽むる人、毀る人、共に世に留まらず、傳へ聞かむ人また〳〵遠かに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られむことを願はむ。譽はまた毀のもとなり。身の後の名殘りて更に益なし。これを願ふも次に愚かなり。たゞし强ひて智をもとめ、賢をねがふ人の爲にいはば、智惠出でては僞あり、才能は煩惱の增長せるなり。傳へて聞き、學びて知るは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。可不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく德もなく、功もなく名もなし。誰か知り誰か傳へむ。これ德をかくし愚を守るにあらず、もとより賢愚得失のさかひに居らざればなり。まよひの心をもちて名利の要を求むるに、かくの如し。萬事はみな非なり。いふに足らず、願ふに足らず。

〔二十九〕 ある人法然上人に、「念佛の時睡りに犯されて行を怠り侍る事、如何して此の障りをやめ侍らむ。」と申しければ、「目の覺めたらむ程念佛し給へ。」と答へられたりける、いと尊かりけり。又、「往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり。」といはれけり。

○智惠出でては僞あり　老子の「智惠出有ニ大僞一。」
○可不可は一條　善惡は唯一つの戒、莊子齊物論。
○法然上人　源空、美作の人、淨土專念宗を唱道した、建暦二年寂。
○一定　きまつて居る事、確定。
○不定　不信仰の人には不確定の義。

○入道　三位以上の人の僧道に入る事。
○人に見ゆ　こゝでは結婚する義。
○賀茂の競馬　賀茂神社の境内で行はるる競馬。
○競人　下賤の輩。
○埒　馬場の柵。
○ついゐて　詰きるて。
○あさみて　輕蔑し。

これも尊し。また、「疑ひながらも念佛すれば往生す。」ともいはれけり。是も亦尊し。

〔四十〕　因幡の國に、何の入道とかやいふものの女、かたちよしと聞きて、人數多いひわたりけれども、この女たゞ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、「かゝる異樣のもの、人に見ゆべきにあらず。」とて親ゆるさざりけり。

〔四十一〕　五月五日賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人たち隔てて見えざりしかば、各おりて埒の際によりたれど、殊に人多く立ちこみて、分け入りぬべき樣もなし。かゝる折に、向ひなる棟の木に、法師の登りて、木の股についゐて物見るあり。取りつきながら、いたう眠りて、墮ちぬべき時に目を覺す事度々なり。これを見る人嘲りあさみて、「世のしれものかな。かく危き枝の上にて安き心ありて眠るらむよ。」といふに、わが心にふと思ひし儘に、「我等が生死の到來唯今にもやあらむ。これを忘れて物見て日を暮す、愚かなる事は猶まさりたるものを。」といひたれば、前なる人ども、「誠然にこそ候ひけれ。尤も愚かに候。」といひて、皆後を見返りて、「こゝへいらせ給へ。」とて、所をさりて呼び入れはべりにき。かほどの理、誰かは思ひよらざらむなれども、折からの思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて物に感ずる事なきにあらず。

○唐橋の中將　源雅通。參議中將。
○僧都　僧官の名稱、僧正、僧都、律師。
○教相　眞言宗で理論的學のを教相と云ふ。
○氣のあがる　のぼせる。
○年のやう〳〵たくる　年がだん〳〵ふける。
○二の舞の面　安摩舞の次の舞に赤く恐ろしき面をかぶる、その面を云ふ。
○狩衣　通常服、もとは狩に用ゐた。
○濃き　單に濃きといへば濃紫。
○指貫　袴の所を紐で括るやうになつて居る袴の一種。
○ゆゑづきたるさま　由緒ありげな樣子。
○そぼぢつゝ　ぬれながら。

〔四十二〕　唐橋の中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。氣のあがる病ありて、年のやう〳〵たくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出でがたかりければ、さま〴〵につくろひけれど、煩はしくなりて、目眉額なども腫れまどひて、うち覆ひければ、物も見えず、二の舞の面の樣に見えけるが、たゞ恐ろしく鬼の顏になりて、目は頂の方につき、額の程鼻になりなどして、後は、坊の内の人にも見えず籠り居て、年久しくありて、猶煩はしくなりて死ににけり。かゝる病もある事にこそありけれ。

〔四十三〕　春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、朧しからぬ家の、奥深く木立ものふりて、庭に散りしをれたる花見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子皆下して、さびしげなるに、東にむきて妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年二十ばかりにて、うちとけたれど、心にくくのどやかなる樣して、机の上に書をくりひろげて見居たり。いかなる人なりけむ、たづね聞かまほし。

〔四十四〕　怪しの竹の編戸の内より、いと若き男の、月影に色合定かならねど、つやゝかなる狩衣に濃き指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、遙かなる田の中の細道を、稻葉の露にそぼぢつゝ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、

○總門　第一の門、正門。
○榻　車の轅を載く臺。
○空薫物　何處ともなく匂ふやうに焚いた香。
○追風用意　自分の通つたあとの風が匂ふ樣にした用意。
○かごとがまし　愚み言を云つて居るやうだ。
○公世の二位の兄　從二位侍從源原公世の兄。
○腹巻しき　怒りつぽい。
○柳原　今京都上京區柳原。
○法印　僧位の一、法印、法眼、法橋。

あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かむかた知らまほしくて、見送りつゝ行けば、笛を吹きやみて、山の際に總門のあるうちに入りぬ。榻にたてたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に問へば、「しか〳〵の宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにや。」といふ。御堂の方に法師ども參りたり。夜寒の風にさそはれくる空薫物の匂ひも、身にしむ心地す。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の、追風用意など、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。心のまゝにしけれる秋の野らは、おきあまる露にうづもれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは、雲のゆきゝも早き心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。

〔四十五〕　公世の二位の兄に、良覺僧正と聞えしは極めて腹惡しき人なりけり。坊の傍に大きなる榎ありければ、人、「榎の僧正」とぞいひける。この名然るべからずとて、かの木を切られにけり。その根のありければ、「切杭の僧正」といひけり。愈腹立ちて、切杭を掘りすてたりければ、その跡大きなる堀にてありければ、「堀池の僧正」とぞいひける。

〔四十六〕　柳原の邊に、强盜法印と號する僧ありけり。度々强盜にあひたる故に、この名をつけにけるとぞ。

○煙ひる　くさめする。
○光親卿　樣中納言藤原光親、光雅の子。
○院　後鳥羽上皇。
○最勝講奉行　最勝講は朝出、最勝講の事務をとり行ふ人。
○供御　天皇などの御膳部。
○衝重　白木づくりの三方。
○有職のふるまひ　かゝる時には公事が多忙なので　有職の心得ある者が臨機の處置をとつたのである。
○古き墳「裏柿ニ兎來ニ方藥ヲ選、古墳猶是少年人」と云へる古句。

〔四十七〕　ある人清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら「嚏嚏」といひもて行きたれば、「尼御前何事をかくは宣ふぞ。」と問ひけれども、答へもせず、猶いひ止まざりけるを、度々とはれて、うち腹だちて、「やゝ、嚏ひたる時、かく呪はねば死ぬるなりと申せば、養ひ君の、比叡の山に兒にておはしますが、たゞ今もや嚏ひ給はむと思へば、かく申すぞかし。」といひけり。あり難き志なりけむかし。

〔四十八〕　光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、供御をいだされて食はせられけり。もの食ひ散らしたる衝重を、御簾の中へさし入れてまかり出でにけり。女房、「あな汚な。誰に取れとてか。」など申しあはれければ、「有職のふるまひ、やんごとなき事なり。」と、かへす〳〵感ぜさせ給ひけるとぞ。

〔四十九〕　老來りて始めて道を行ぜむと待つ事勿れ。古き墳多くはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちにこの世を去らむとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれる事は知らるれ。あやまりといふは他の事にあらず、速かにすべき事をゆるくし、ゆるくすべきことを急ぎて過ぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆとも甲斐あらむや。人はたゞ無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて、つかの間も忘るまじきなり。さらば

○禪林の十因　東山永觀堂を禪林寺と云ふ、その永觀律師の作つた往生十因をいふ。
○應長　花園帝の御代、一年だけ。
○西園寺　當時の關原實俊の邸。
○院　上皇の御所、後宇多院。
○そこ〳〵に　どこそこに。
○安居院　山城愛宕郡の寺名、比叡山東塔竹林院の里坊であつた。
○今出川　一條東洞院邊を北から南へ流れた川。
○院の御飛數　一條大路に加茂祭御見物のためありし飛數。

などか此の世の濁りもうすく、佛道を勤むる心もまめやかならざらむ。昔ありける聖は、人のきたりて自他の要事をいふとき、答へていはく、「今火急の事ありて、既に朝夕にせまれり。」とて、耳をふたぎて念佛して、終に往生を遂げたりと、禪林の十因にはべり。心戒といひける聖は、餘りにこの世のかりそめなることを思ひて、靜かについゐるける事だになく、常はうづくまりてのみぞありける。

〔五十〕　應長のころ、伊勢の國より、女の鬼になりたるを率て上りたりといふ事ありてその頃二十日ばかり、日ごとに京白川の人、鬼見にとて出で惑ふ。「昨日は西園寺に參りたりし、今日は院へまゐるべし。たゞ今はそこ〳〵に。」など云ひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、虛言といふ人もなし。上下たゞ鬼の事のみいひやまず。その頃東山より、安居院の邊へまかり侍りしに、四條より上ざまの人、みな北をさして走る。「一條室町に鬼あり。」とのゝしりあへり、今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更に通り得べうもあらず立ちこみたり。はやく跡なき事にはあらざんめりとて、人をやりて見するに、大方あへるものなし。暮るゝまでかく立ちさわぎて、はては鬪諍おこりて、あさましきことどもありけり。そのころおしなべて、二日三日人のわづらふこと侍りしをぞ、「かの鬼の

○はやく跡なき　もとより無根。
○龜山殿　龜山帝謚位の後山莊を離宮龜山に遷てられた、その御殿。
○やすらかに結ひて　樂々と作り上ゆて
○仁和寺　山城葛野郡花開村にある寺、眞言宗、俗に御室。
○石清水　男山八幡宮。
○かちより　徒步で
○極樂寺　高良、共に男山の麓にある末寺末社。
○ゆかし　見たい知りたいと思ふ。
○先達　先輩、案內者。
○足鼎　足の三本ある鼎。
○かづき　かぶる。

虛言は、この兆を示すなりけり。」といふ人も侍りし。

〔五十一〕　龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられむとて、大井の土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くの錢を賜ひて、數日に營み出してかけたりけるに、大方廻らざりければ、とかく直しけれども、終に廻らで、徒らに立てりけり。さて宇治の里人を召してこしらへさせられければ、やすらかに結ひて參らせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水を汲み入るゝ事めでたかりけり。萬にその道を知れるものは、やんごとなきものなり。

〔五十二〕　仁和寺に、ある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心憂く覺えて、ある時思ひたちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて傍の人に逢ひて、「年ごろ思ひつる事果たし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へのぼりしは、何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきことなり。

〔五十三〕　これも仁和寺の法師、童の法師にならむとする名殘とて、各遊ぶことありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにする

を、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、満座興に入ること限りなし。しばし奏でて後、抜かむとするに、大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせむと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らむとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、叶はで、すべき様なくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師の許率て行きけるに、道すがら人の怪しみ見る事限りなし。醫師の許にさし入りて、むかひ居たりけむ有様、さこそ異様なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。かゝる事は書にも見えず、傳へたる教へもなしといへば、また仁和寺へかへりて、親しきもの、老いたる母など、枕上により居て泣き悲しめども、聞くらむとも覺えず。かゝる程に、或者のいふやう、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ、たゞ力をたてて引き給へ。」とて、藁の帯をまはりにさし入れて、金を隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻かけうげながら、抜けにけり。からき命まうけて、久しく病み居たりけり。

〔五十四〕　御室にいみじき兒のありけるを、いかで誘ひ出して遊ばむとたくむ法師どもありて、能あるあそび法師どもなど語らひて、風流の破籠やうのもの、ねんごろに營み出で

○くゞもり聲　含まれて不明瞭な言葉。
○蓄　趣の心。
○かけうげ　缺け穿たれ。
○御室　仁和寺の事。
○語らひ　仲間にひき入れ。
○破籠やうのもの　中に隔てがあつて割つてある弁當の類。

て、箱風情のものに認め入れて、雙の岡の便りよき所にうづみおきて、紅葉ちらしかけなど、思ひよらぬさまにして、御所へまゐりて、兒をそゝのかし出でにけり。うれしく思ひて、こゝかしこ遊びめぐりて、ありつる苔の筵に並みゐて、「いたうこそ困じにたれ。あはれ紅葉を燒かむ人もがな。しるしあらむ僧たち、いのり試みられよ。」などいひしろひて、埋みつる木のもとに向きて、數珠おしすり、印ことゞ〳〵しく結びいでなどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つや〳〵物も見えず。所の違ひたるにやとて、掘らぬ所もなく山をあされども無かりけり。埋みけるを人の見おきて、御所へ參りたる間に盗めるなりけり。法師ども言の葉なくて、聞きにくいさかひ腹だちて歸りにけり。あまりに興あらむとすることは、必ずあいなきものなり。

〔五十五〕　家のつくりやうは夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。暑き頃わろき住居は堪へがたきことなり。深き水は涼しけなし、淺くて流れたる、遙かに涼し。細かなるものを見るに、遣戸は蔀の間よりもあかし。天井の高きは、冬寒く、燈くらし。造作は用なき所をつくりたる、見るもおもしろく、よろづの用にも立ちてよし。」とぞ、人のさだめあひ侍りし。

○雙の岡　御室にある丘陵。
○便りよき所　都合のよい所。
○ありつる　例の、前に埋めた所を意味する。
○紅葉を燒かむ人　白氏文集の「林間煖酒燒紅葉」の句意を採り、酒を暖めん人。
○印　眞言宗の秘密法、指にて種々の形をして呪法とする。
○いらなく　勿體らしく、大仰に。
○つや〳〵　さんざ
○あいなき　面白味がない。
○遣戸　横に引いてあける戸。
○蔀の間　格子のはまつた部屋。
○造作　間取

○次ざまの人　身分のよくない人。
○あからさま　一寸かりそめ。
○よき人　品格のよき人。
○のゝしる　大騒ぎ。
○らうがはし　乱りがはし。
○見ざま　様子。
○わびし　貧だ。
○かたはらいたく　傍で見て居ても氣の毒で。
○羨ましからむ　氣が乗らうや。
○器物　きりやう。
○世を貪る　人世の欲を思ふまゝに欲求する。

〔五十六〕　久しく隔たりて逢ひたる人の、わが方にありつる事、數々に殘りなく語り續くるこそあいなけれ。へだてなく馴れぬる人も、ほどへて見るは恥しからぬかは。次ざまの人は、あからさまに立ち出でても、興ありつることとて、息もつぎあへず語り興ずるぞかし。よき人の物がたりするは、人あまたあれど、一人に向きていふを、自ら人も聽くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく數多の中にうち出でて、見る事のやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。をかしき事をいひてもいたく興ぜぬと、興なき事をいひてもよく笑ふにぞ、品の程はかられぬべき。人の見ざまのよしあし、才ある人はその事など定めあへるに、おのが身にひきかけていひ出でたる、いとわびし。

〔五十七〕　人のかたり出でたる歌物語の、歌のわろきこそ本意なけれ。すこしその道知らむ人は、いみじと思ひては語らじ。すべていとも知らぬ道の物がたりしたる、かたはらいたく聞きにくし。

〔五十八〕　「道心あらば住む所にしもよらじ、家にあり人に交はるとも、後世を願はむに難かるべきかは。」といふは、更に後世知らぬ人なり。けにはこの世をはかなみ、必ず生死を出でむと思はむに、何の興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧る營みの勇ましからむ。

○無下　此上ない惡いこと。
○一鉢のまうけ　僧は鐵鉢に食料を入れるから云ふ、一杯の食物の用意。
○霜の露　霜の吸物
粗食の意。韓愈の詩に「霜露尚如レ此用食安可」言る」
○菩提　正しい佛教の悟り、驗語名義集に「道之極名稱曰菩提。」
○大事　こゝでは修道の修行。
○認め設けて　よくさり測べ始末して。
○年ごろも云々　年來かうして居るのなら此兎に角、僅な時間ですむのであるからの意。

心は緣にひかれて移るものなれば、靜かならでは、道は行じがたし。その器昔の人に及ばず、山林に入りても、飢をたすけ、嵐を防ぐよすがなくては、あられぬわざなれば、おのづから世を貪るに似たる事も、便りに觸れば、などか無からむ、さればとて、「背けるかひなし。さばかりならば、なじかは捨てし。」なんどいはむは無下の事なり。さすがに一たび道に入りて、世をいとはむ人、たとひ望みありとも、勢ひある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾麻の衣、一鉢のまうけ、藜の羹、いくばくか人の費をなさむ。もとむる所はやすく、その心早く足りぬべし。形に恥づる所もあれば、さはいへど、惡にはうとく、善には近づくことのみぞ多き。人と生れたらむしるしには、いかにもして世を遁れむ事こそあらまほしけれ。偏に貪ることをつとめて、菩提に赴かざらむは、よろづの畜類にかはる所あるまじくや。

〔五十九〕　大事を思ひたたむ人は、さり難き心にかゝらむ事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。しばしこの事果てて、おなじくば彼の事沙汰しおきて、しかゞ〳〵の事人の嘲りやあらむ、行末難なく認め設けて、年ごろもあればこそあれ、その事待たむ程あらじ、物さわがしからぬやうになど思はむには、え去らぬ事のみいとゞ重なりて、事の盡く

○一期　一生涯。

○海蘇院　仁和寺内の一坊、門主の隠居所。
○芋頭　里芋の親。
○二百貫　一貫は一千文。
○三萬疋　一疋は十文、一貫は百疋と云ふ、三百萬疋は三百貫。
○しろうるり　語調が何となく滑稽に聞え坊主らしく聞える出鱈目の解説、語意を考説する必要はない。

る限りもなく、思ひたつ日もあるべからず。おほやう人を見るに、少し心ある際は、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は、「しばし。」とやいふ。身を助けむとすれば、恥をも顧みず、財をも捨てて遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の來ることは、水火の攻むるよりも速かに、遁れがたきものを、その時老いたる親、いときなき子、君の恩、人の情、捨てがたしとて捨てざらむや。

〔六十〕　眞乘院に、盛親僧都とてやんごとなき智者ありけり。芋頭といふものを好みて多く食ひけり。談義の座にても、大きなる鉢にうづたかく盛りて、膝もとにおきつゝ、食ひながら書をも讀みけり。煩ふ事あるには、七日二七日など療治とて籠り居て、思ふやうによき芋頭をえらびて、ことに多く食ひて、萬の病をいやしけり。人に食はすることなし、たゞ一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに錢二百貫と坊ひとつを譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を芋頭の錢と定めて、京なる人に預けおきて、十貫づゝ取りよせて、芋頭を乏しからずめしけるほどに、また他用に用ふる事なくて、その錢皆になりにけり。「三百貫のものを貧しき身にまうけて、かく計らひける、誠にあり難き道心者なり。」とぞ人申しける。この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何ものぞ。」と人の問ひければ、「さるものを我も知らず。もしあらましかば、この僧の顔に似てむ。」とぞいひける。この僧都、みめよく、力つよく、大食にて、能書、學匠、辯説人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、世を輕く思ひたる曲物にて、よろづ自由にして、大かた人に隨ふといふ事なし。出仕して饗膳などにつく時も、皆人の前するゑわたすを待たず、我が前にするゑぬれば、やがて獨りうち食ひて、歸りたければ、ひとりついたちて行きけり。時非時も人にひとしく定めて食はず、我が食ひたき時、夜中にも曉にも食ひて、ねぶたければ晝もかけ籠りて、いかなる大事あれども、人のいふこと聽き入れず。目覺めぬれば、幾夜もいねず。心をすまして嘯き歩きなど、世の常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろづ許されけり。德のいたれりけるにや。

〔六十一〕　御産の時、甑落す事は、定まれることにはあらず。御胞衣滯る時の呪なり。滯らせ給はねばこの事なし。下ざまより事おこりて、させる本説なし。大原の里の甑をめすなり。ふるき寶藏の繪に、賤しき人の子産みたる所に、甑おとしたるを書きたり。

〔六十二〕　延政門院幼くおはしましける時、院へ參る人に、御ことづてとて申させ給ひ

○宗の法燈　一宗の光明たる中心人物。
○曲者　こゝでは變物、ひねくれ者。
○時非時　僧は一日一食正午に食する、夫以外に晩食などするをかく云ふ。
○嘯き　こゝでは飄然として居る形容である、空うそぶく有様。
○飯　蒸籠、飯をむす器具。
○胞衣　胎兒を包める膜、子が歌くため子數と顔と同時で禁厭に用ゐたのだ、次の大原も大腹と通じ安産を望む心持だ。
○本説　正しき確かな據り所。
○延政門院　悦子内親王後嵯峨帝の女。

○ふたつもじ　こ字
○牛の角文字　い字
○直な文字　し字
○ゆがみもじ　く字
○後七日　朝廷で行はるゝ正月八日から七日間の佛會。
○車の五緒　車の簾の縁と編目の絲を被ふ革との間に同じ革で鳳凰二筋を乗れたもの。
○冠者　冠の人物。
○岡本殿白殿　藤原家平、家基の子。
○烏一雙　雄一番。
○五葉　五葉の松。
○かへし刀云々　枝を斜に切りその先を又反對から五分だけ切る。
○しゞら藤　つゞら藤。

ける御歌、

ふたつ文字牛の角文字直な文字ゆがみもじとぞ君はおぼゆる

こひしく思ひまゐらせ給ふとなり。

〔六十三〕　後七日の阿闍梨、武者を集むる事、いつとかや盗人に逢ひにけるより、宿直人とてかくこと〴〵しくなりにけり。一とせの相は、この修中の有様にこそ見ゆなれば、兵を用ひむこと穏かならぬ事なり。

〔六十四〕　「車の五緒は必ず人によらず、ほどにつけて極むる官位に至りぬれば乗るものなり。」とぞ、ある人おほせられし。

〔六十五〕　「このごろの冠は、昔よりは遙かに高くなりたるなり。」とぞ、ある人おほせられし。古代の冠桶を持ちたる人は、端をつぎて今は用ふるなり。

〔六十六〕　岡本關白殿、盛りなる紅梅の枝に、烏一雙をそへて、この枝につけて參らすべき由、御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、「花に烏つくる術知り候はず、一枝に二つつくることも存じ候はず。」と申しければ、膳部にたづねられ、人々に問はせ給ひて、また武勝に、「さらば汝が思はむやうにつけて參らせよ。」と仰せられたりければ、花もなき梅の枝に、一つをつけてまゐらせけり。武勝が申し侍りしは、「柴の枝、梅の枝、つぼみたると散りたるにつく。五葉などにも著く。枝の長さ七尺、あるひは六尺、かへし刀五分に切る、枝のなかばに烏をつく。著くる枝踏まする枝あり。しゞら藤の割らぬにて二所つくべし。藤のさきは、火うち羽のたけに比べて切りて、牛の角のやうに撓むべし。初雪のあした、枝を肩にかけて、中門より振舞ひてまゐる。大砌の石を傳ひて、雪に跡をつけず、雨覆ひの毛を少しかなぐり散らして、二棟の御所の高欄によせかく。祿をいださるれば、肩にかけて拜して退く。初雪といへども、杏のはなの隠れぬほどの雪にはまゐらず。雨覆ひの毛を散らすことは、鷹は弱腰を取ることなれば、御鷹の取りたるよしなるべし。」と申しき。花に烏つけずとは、いかなる故にかありけむ。長月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、「君がためにと折る花は時しもわかぬ。」といへること、伊勢物語に見えたり。作り花は苦しからぬにや。

〔六十七〕　賀茂の岩本、橋本は、業平、實方なり。人の常にいひ紛へ侍れば、一とせ參りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを、呼びとゞめて尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覺えはべる。吉水の和尚、

○大砌　軒下の石。
○雨覆ひの毛　雉の尾の防禦の所にある毛。
○かなぐり　むしる
○君がためにと　伊勢物語に「我が頼む君がためにと折る花は時しも分かぬものにぞありける。」
○岩本橋本　共に上賀茂神の側にある社
○實方　藤原實方、家時の子　左近中將。
○云ひ紛へ　混同して云ふこと。
○御手洗　神社前の川或は泉、參詣人の手を洗ふ所。
○吉水の和尚　慈鎮和尚の事、東山吉水に居たからかく云ふ　關白忠通の子。

月をめで花をながめし古のやさしき人はこゝにあり原

と詠みたまひけるは、岩本の社とこそ承りおき侍れど、おのれらよりは、なか〳〵御存じなどもこそさぶらはめ。」と、いと恭しくいひたりしこそ、いみじく覺えしか。

今出川の院の近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時、常に百首の歌を詠みて、かの二つの社の御前の水にて、書きて手向けられけり。誠にやんごとなき譽ありて、人の口にある歌おほし。作文詩序などいみじく書く人なり。

〔六十八〕　筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなる者のありけるが、土大根を萬にいみじき藥とて、朝ごとに二つづゝ燒きて食ひける事、年久しくなりぬ。ある時、館のうちに人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ來りて圍み攻めけるに、館の内につはもの二人出できて、命を惜しまず戰ひて、皆追ひかへしてけり。いと不思議におぼえて、「日頃こゝにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戰ひしたまふは、いかなる人ぞ。」と問ひければ、「年來たのみて、あさな〳〵めしつる土大根らに候。」といひて失せにけり。深く信を致しぬれば、かゝる徳もありけるにこそ。

〔六十九〕　書寫の上人は、法華讀誦の功積りて、六根淨にかなへる人なりけり。旅の假屋に立ち入られけるに、豆の殼を焚きて豆を煮ける音の、つぶ〳〵と鳴るを聞きたまひければ、「疎からぬ己等しも、うらめしく我をば煮て、辛き目を見するものかな。」といひけり。焚かるゝ豆がらのはら〳〵と鳴る音は、「わが心よりする事かは。燒かるゝはいかばかり堪へがたけれども、力なきことなり。かくな恨み給ひそ。」とぞ聞えける。

〔七十〕　元應の清暑堂の御遊に、玄上は失せにしころ、菊亭の大臣、牧馬を彈じ給ひける に、座につきてまづ柱をさぐられたりければ、ひとつ落ちにけり。御ふところに續飯をもち給ひたるにて付けられにければ、神供の參るほどに、よく干て事故なかりけり。いかなる意趣かありけむ、物見ける衣被の、よりて放ちて、もとのやうに置きたりけるとぞ。

〔七十一〕　名を聞くより、やがて面影はおしはからるゝ心地するを、見る時は、又かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家のそこ程にてぞありけむと覺え、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。またいかなる折ぞ、たゞ今人のいふことも、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かゝる事のいつぞやありしがと覺えて、いつとは思ひいでねども、まさしくありし心地のするは、我ばかりかく思ふにや。

○今出川の院の近衛　今出川院は亀山帝の中宮姈子、夫に仕へた近衛と云ふ女房

○押領使　數郡の領守で該地方の騒人鎮定の役人。

○土大根　大根。

○書寫の上人　播磨書寫山に居た性空、橘善根の子。

○六根淨　六根、眼耳、鼻、舌、身、意の淨淨なること。

○豆の殼　此の豆殼の話は支那七歩の詩から出て居る、魏文帝兄曹植を召し七歩の中に詩を作らせ、出來ねば殺すと云つた。その時曹植の詩「煮豆持作羹、漉豉以爲汁、萁在釜下燃、豆在釜中泣、本自同根生、相煎何太急。」

○清暑堂　宮中奏樂院の後の殿。

○玄上　牧馬　共に琵琶の名器。

○菊亭　藤原愛季、西園寺公相の孫。

○意趣　遺恨。

○物見ける云々　顏かくせる婦人の所爲たる事を說明してある。

○持佛堂　佛像位牌など納めて置く所。
○作善　自分のした善行、例へば佛像供養、經典書寫の事など書き列ねること。
○文車　下に車をつけた持ち運びの容易くできる書櫃。
○塵塚　ごみため、
○かたくなる人　頑の强い理解のない人。
○かつ顯はる　一方から顯はれる。
○所々うちおほめき　わざと所々をあいまいにして。

〔七十二〕　賤しけなるもの。居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、持佛堂に佛の多き、前栽に石草木のおほき、家のうちに子孫のおほき、人にあひて詞のおほき、願文に作善おほく書き載せたる。おほくて見苦しからぬは、文車の文、塵塚のちり。

〔七十三〕　世に語り傳ふる事、誠はあいなきにや、多くは皆虛言なり。あるにも過ぎて、人はものをいひなすに、まして年月すぎ、境も隔たりぬれば、いひたき儘に語りなして、筆にも書き留めぬれば、やがて定りぬ。道々のものの上手のいみじき事など、かたくなる人の、その道知らぬは、そゞろに神の如くにいへども、道知れる人は更に信も起さず。昔にきくと見る時とは、何事も變るものなり。かつ顯はるゝも顧みず、口に任せていひちらすは、やがて浮きたることと聞ゆ。又我も實しからずは思ひながら、人のいひし儘に、鼻の程をごめきて言ふは、その人の虛言にはあらず。けに〳〵しく、所々うちおほめき、能く知らぬよしして、さりながら、つま〴〵合せて語る虛言は、恐ろしき事なり。わが爲面目あるやうに言はれぬる虛言は、人いたくあらがはず、皆人の興ずる虛言は、一人さもなかりし物をといはむも詮なくて、聞き居たる程に、證人にさへなされて、いとゞ定りぬべし。とにもかくにも虛言多き世なり。唯常にある、珍しからぬ事の儘に心えたらむ、よ

○極者　神佛が衆生濟度のため此世にかりに出現せる者の意。
○期するところ　必ず來るもの。
○念々の間　一刹那　一刹那とすぎゆく間
○先途　到著點、死して行く先。
○常住　永久不變。
○つれ〴〵わぶる　徒然をこまる。

ろづ違ふべからず。下ざまの人のものがたりは、耳驚くことのみあり。よき人はあやしき事を語らず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虛言を懇に信じたるも、をこがましく、「よもあらじ。」などいふも詮なければ、大方は眞しくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひあざけるべからず。

〔七十四〕　蟻の如くに集りて、東西にいそぎ南北に走る。貴きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり、行く所あり、歸る家あり、夕にいねて朝に起く。營む所何事ぞや。生を貪り利を求めてやむ時なし。身を養ひて何事をか待つ、期するところたゞ老と死とにあり。その來る事速かにして、念々の間に留まらず。これを待つ間、何の樂しみかあらむ。惑へるものはこれを恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。愚かなる人はまたこれをかなしぶ。常住ならむことを思ひて、變化の理を知らねばなり。

〔七十五〕　つれ〴〵わぶる人は、いかなる心ならむ。紛るゝ方なく、唯一人あるのみこそよけれ。世に從へば、心外の塵にうばはれて惑ひ易く、人に交はれば、言葉よそのききに隨ひて、さながら心にあらず。人に戲れ、物に爭ひ、一度はうらみ、一度はよろこぶ。そのこと定れることなし。分別妄りに起りて、得失やむ時なし。まどひの上に醉へり、醉の

○惑れて　ほけける事。
○摩訶止觀　天台大師の著書、十卷妙法蓮華經觀心の義を述べたもの、天台三大部の一。

○もてあつかひぐさ　もて囃す材料。
○いろふ　取扱ふ、干渉する。
○うけられね　呑み込めない。
○今更の人　今あらたに交際する人。
○こゝもと　こちらで。
○言ひつけたる　云ひ觸れた。

中に夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたること、人皆かくのごとし。いまだ誠の道を知らずとも、縁を離れて身を閑にし、事に與らずして心を安くせむこそ、暫く樂しぶともいひつべけれ。生活、人事、技能、學問等の諸縁をやめよ。」とこそ、摩訶止觀にもはべれ。

〔七十六〕　世のおぼえ花やかなるあたりに、嘆きも喜びもありて、人多く往きとぶらふ中に、聖法師の交りて、いひ入れ佇みたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべきゆゑありとも、法師は人にうとくてありなむ。

〔七十七〕　世の中に、そのころ人のもてあつかひぐさに言ひあへること、いろふべきにはあらぬ人の、能く案内知りて、人にもかたり聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。殊にかたほとりなる聖法師などぞ、世の人の上はわが如く尋ね聞き、如何でかばかりは知りけむと覺ゆるまでぞ言ひ散らすめる。

〔七十八〕　今樣の事どもの珍しきを、いひ廣めもてなすこそ、又うけられね。世に事ふりたるまで知らぬ人は心にくし。今更の人などのある時、こゝもとに言ひつけたる言種、物の名など心得たるどち、片端言ひかはし、目見合はせ笑ひなどして、心しらぬ人に心得ず

○世なれず　社交馴れない。（かく樂屋落を云つて喜ぶからだ。）
○夷　東國の田舍武士をさす。
○氣色し　顏色をする事。
○連歌　和歌三十一字を上句下句と二人して詠み一首とする文學、鎖連歌とて長く續くのもある。
○上達部　三位以上の貴族。
○殿上人　昇殿を許されて居る貴族、通常五位以上、或は六位の藏人。
○その家　武術專門の家。
○障子　今の所謂。
○かたくななる筆樣　下品な書き樣。

思はすること、世なれずよからぬ人の必ずあることなり。

〔七十九〕　何事も入りたたぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知りがほにやはいふ。片田舍よりさしいでたる人こそ、萬の道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば世に恥しき方もあれど、自らもいみじと思へる氣色、かたくなり。よく辨へたる道には、必ず口おもく、問はぬかぎりは、言はぬこそいみじけれ。

〔八十〕　人ごとに、我が身にうとき事をのみぞ好める。法師は兵の道をたて、夷は弓ひく術知らず、佛法知りたる氣色し、連歌し、管絃を嗜みあへり。されどおろかなる己が道より、なほ人に思ひあなづられぬべし。法師のみにもあらず、上達部、殿上人、上さままで、おしなべて武を好む人多かり。百たび戰ひて百たび勝つとも、いまだ武勇の名を定めがたし。その故は運に乘じて敵をくだく時、勇者にあらずといふ人なし。兵盡き矢きはまりて、遂に敵に降らず、死を安くして後、はじめて名を顯はすべき道なり。生けらむほどは武に誇るべからず。人倫に遠く、禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。

〔八十一〕　屏風障子などの繪も文字も、かたくなる筆樣して書きたるが、見にくきより

○物がら　物の質。
○頓阿　歌人、兼好と同時代、四天王の一。
○上下はづれ　本、巻物などの上下の端
○螺鈿　漆器に貝を飾りに入れたもの。
○弘融　兼好と同時代の歌人。
○竹林院入道　西園寺公衡　實兼の子。
○一の上　左大臣。
○洞院左大臣　藤原實泰。
○相國　太政大臣。
○亢龍の悔い　易の乾卦に「亢龍有悔」、亢龍は昇天した龍。

も、宿の主人の拙く覺ゆるなり。大かた持てる調度にても、心おとりせらるゝ事はありぬべし。さのみよき物を持つべしとにもあらず、損ぜざらむためとて、品なく見にくきさまに爲なし、珍しからむとて、用なき事どもしそへ、煩はしく好みなせるをいふなり。古めかしきやうにて、いたくことゞ〳〵しからず、費もなくて、物がらのよきがよきなり。

〔八十二〕「羅の表紙は、疾く損ずるが侘しき。」と人のいひしに、頓阿が、「羅は上下はづれ、螺鈿の軸は、貝落ちて後こそいみじけれ。」と申し侍りしこそ、心勝りて覺えしか。一部とある草紙などの、同じ樣にもあらぬを、醜しといへど、弘融僧都が、「物を必ず一具に整へむとするは拙き者のする事なり。不具なるこそよけれ。」といひしも、いみじく覺えしなり。總て何も皆事整ぼりたるはあしき事なり。し殘したるを、さてうちおきたるは、面白く、生き延ぶる事なり。「内裏造らるゝにも、必ず造りてはてぬ所を殘す事なり。」と、ある人申し侍りしなり。先賢の作れる内外の文にも、章段の闕けたる事のみこそ侍れ。

〔八十三〕竹林院入道左大臣殿、太政大臣にあがり給はむに、何の滯りかおはせむなれども、「珍しけなし。一の上にてやみなむ。」とて、出家し給ひにけり。洞院左大臣殿、この事を甘心し給ひて、相國の望みおはせざりけり。亢龍の悔いありとかやいふ事侍るなり。

○法顯三藏　支那晉代の高僧、三藏は經律論の三つに精通した僧の尊稱。
○渡　單に支那の意
○人の國　外國。
○下愚の性うつるべからず　論語に「上智與二下愚一不レ移」敎育しても善に移す見込のない事。
○驥　千里を走る名馬、楊子法言に「驥之馬赤驥之乘也。」
○惟繼中納言　藤原親王の孫、高藤の子。
○風月の才　自然を詠ずる才、詠歌の才。
○精進　美食せずひたすら佛道に邁進すること。
○寺法師　園城寺の僧の事。

月滿ちては缺け物盛りにしては衰ふ。萬の事さきのつまりたるは、破れに近き道なり。

〔八十四〕法顯三藏の天竺に渡りて、故鄕の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢の食を願ひ給ひける事を聞きて、「さばかりの人の、無下にこそ、心弱き氣色を、人の國にて見え給ひけれ。」と人のいひしに、弘融僧都、「優に情ありける三藏かな。」といひたりしこそ、法師の樣にもあらず、心にくく覺えしか。

〔八十五〕人の心すなほならねば、僞りなきにしもあらず、されど自ら正直の人などかなからむ。己すなほならねば、人の賢を見て羨むは世の常なり。いたりて愚かなる人は、たまゝ賢なる人を見てこれを憎む。「大きなる利を得むが爲に少しきの利を受けず、僞り飾りて名を立てむとす。」と謗る。おのれが心に違へるによりて、この嘲りをなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず、僞りて小利をも辭すべからず。假にも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば、則ち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば、惡人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢をまなばむを賢といふべし。

〔八十六〕惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて、讀經うちして、寺

○圓伊　藤伊平の孫、尊道の子、歌人。
○文保　花園帝の御代、文保元年四月二十五日改元。
○秀句　言語上の洒落の意。
○木幡　山城宇治郡
○現心　正氣。

法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺やかれし時、坊主にあひて、「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ今よりは法師とこそ申さめ。」といはれけり。いみじき秀句なりけり。

〔八十七〕　下部に酒のまする事は心すべき事なり。宇治に住みける男、京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申し睦びけり。ある時迎へに馬を遣したりければ、「遙かなる程なり、口つきの男に、まづ一度せさせよ。」とて酒を出したれば、さしうけさしうけよゝと飲みぬ。太刀うち佩きてかひ〴〵しけなれば、賴もしく覺えて、召し具して行くほどに、木幡の程にて、奈良法師の、兵士あまた具して逢ひたるに、この男立ち對ひて、「日暮れにたる山中に、怪しきぞ。とまり候へ。」といひて、太刀をひき拔きければ、人も皆太刀ぬき矢矧けなどしけるを、具覺坊手をすりて、「現心なく醉ひたるものに候ふ。枉けて許し給はらむ。」といひければ、おの〴〵嘲りて過ぎぬ。この男具覺坊にあひて、「御坊は口惜しき事し給ひつるものかな。おのれ醉ひたること侍らず。高名つかまつらむとするを、拔ける太刀空しくなし給ひつること。」と怒りて、ひたぎりに斬り落しつ。さて、「山賊あり。」とのゝしりければ、里人おこりて出であへば、「われこそ山賊よ。」といひて

○橋原　普通名詞ではなささうであるが現今では不明。
○によび伏し　うめき伏し。
○小野道風　能書家、醍醐、朱雀、村上三帝に歷仕した。
○和漢朗詠集　藤原公任の編著、和漢詩人の妙句及び名歌を觀め、朗詠の材料としたもの。
○四條大納言　公任の事。
○猫また　老猫の尾がふたまたに分れたもの、怪異をなし猫魔になると一般に信ぜられた。
○行願寺　革堂（開山行願）だと云ふ說。

走りかゝりつゝ斬り廻りけるを、あまたして手負はせ、うち伏せてしばりけり。馬は血つきて宇治大路の家に走り入りたり。あさましくて、男ども數多走らかしたれば、具覺坊は梶原にによび伏したるを、求め出でて、舁きもて來つ。からき命生きたれど、腰きり損ぜられて、かたはになりにけり。

〔八十八〕　あるもの小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人、「御相傳浮けることには侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを、道風書かむこと、時代や違ひはべらむ、覺束なくこそ。」といひければ、「さ候へばこそ、世に有り難きものには侍りけれ。」とていよ〴〵祕藏しけり。

〔八十九〕　「奥山に、猫またと云ふものありて、人を食ふなる。」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の經あがりて、猫またになりて、人とる事はあなるものを。」といふものありけるを、なに阿彌陀佛とかや連歌しける法師の、行願寺の邊にありけるが聞きて、「一人ありかむ身は心すべきことにこそ。」と思ひける頃しも、ある所にて、夜ふくるまで連歌して、たゞ一人かへりけるに、小川の端にて、音に聞きし猫またあやまたず足もとへふと寄り來て、やがて搔きつくまゝに、頸のほどを食はむとす。肝心もうせて、防が

○松　松明。
○賭物　連歌の懸賞でとつた賞品。
○希有　めづらしくやつと。
○大納言法印　氏名不詳。
○知りて　男色の關係で親しくなる意。
○赤舌日　赤舌は羅刹神の司る日とて、忌み憚つた、例へば正月七月は、三、九、十五、二十一、二十七日を忌む如き類。
○陰陽道　天文曆數ト筮等を研究する道もとは陰陽五行の理を研究することから出來た名稱。
○沙汰　噂、評判。
○末通らず　成就しない。

むとするに力もなく、足も立たず、小川へころび入りて、「助けよや、猫また、よやよや。」と叫べば、家々より松どもともして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。こはいかにとて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物とりて、扇小箱など懐に持ちたりけるも、水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、這ふ〳〵家に入りにけり。侗ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

〔九十〕　大納言法印のめしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふ者を知りて、常にゆき通ひしに、ある時いでて歸り來るを、法印、「いづくへ行きつるぞ。」と問ひしかば、「やすら殿の許まかりて候。」といふ。「そのやすら殿は、男か法師か。」とまた問はれて、袖かき合せて、「いかゞ候らむ。頭をば見候はず。」と答へ申しき。などか頭ばかりの見えざりけむ。

〔九十一〕　赤舌日といふ事、陰陽道には沙汰なき事なり。昔の人これを忌まず。この頃何者のいひ出でて忌み始めけるにか、この日ある事末通らずといひて、その日いひたりしこと、爲たりし事叶はず、得たりし物は失ひ、企てたりし事成らずといふ、愚かなり。吉日を選びてなしたるわざの、末通らぬを數へて見むも、亦等しかるべし。その故は、無常變易の境、ありと見るものも存せず、始めあることも終りなし。志は遂げず、望みは絶えず。人の心不定なり、ものみな幻化なり。何事かしばらくも住する。この理を知らざるなり。吉日に惡をなすに必ず凶なり、惡日に善を行ふにかならず吉なりといへり。吉凶は人によりて日によらず。

〔九十二〕　ある人弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師の曰く、「初心の人二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり、毎度たゞ得失なく、この一箭に定むべしと思へ。」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむことを期せり。況んや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞたゞ今の一念において、直ちにすることの甚だ難き。

〔九十三〕　「牛を賣る者あり、買ふ人、明日その價をやりて牛を取らむといふ。夜の間に牛死ぬ。買はむとする人に利あり、賣らむとする人に損あり。」と語る人あり。これを聞きて傍なるものの曰く、「牛の主まことに損ありといへども、又大なる利あり。その故は、生あるもの死の近き事を知らざること、牛既に然なり。人またおなじ。はからざるに牛は死

○もろ矢　二つの矢を一手に持つこと。
○今の一念に　現在の一刹那に。

○いたつがはしく　面倒な思ひをして。
○この財　人の生命を云ふ。
○佛の財　金銀財寶なり。
○生死の相　生死の姿、現象。
○實の理　眞の悟脫
○常磐井の相國　藤原實氏、公經の子、從一位太政大臣。
○北面　北面の武士　上皇の院を護衛する役。
○放たれ　隙を免ぜられる。
○くりかた　刳つた形、蓋にある。
○軸　箱の左方。
○表紙　箱の右方。

し、計らざるに主は存せり。一日の命萬金よりもおもし。牛の價鵝毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はむ人、損ありといふべからず。」といふに、皆人嘲りて、「その理は牛の主に限るべからず。」といふ。また曰く、「されば、人死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び日日に樂しまざらむや。愚かなる人この樂しみを忘れて、いたつがはしく外の樂しみをもとめ、この財を忘れて、危く他の財を貪るには、志滿つる事なし。いける間生を樂しまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人みな生を樂しまざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るゝなり。もしまた生死の相にあづからずといはば、實の理を得たりといふべし。」といふに、人いよ〳〵嘲る。

〔九十四〕　常磐井相國出仕したまひけるに、敕書を持ちたる北面あひ奉りて、馬よりおりたりけるを、相國後に、「北面なにがしは、敕書を持ちながら下馬し侍りしものなり、かほどのもの、いかでか君に仕うまつり候ふべき。」と申されければ、北面を放たれにけり。敕書を馬の上ながら捧げて見せ奉るべし、おるべからずとぞ。

〔九十五〕　「箱のくりかたに緒を著くる事、いづ方につけ侍るべきぞ。」と、ある有職の人に尋ね申し侍りしかば、「軸につけ表紙につくること、兩說なれば、何れも難なし。文の箱は多くは右につく。手箱には軸につくるも常のことなり。」と仰せられき。

○めなもみ　稀薄草の俗稱、ナモミの一種、葉は三綴、秋小黃花を開く。
○君子に仁義　君子も仁義に拘泥し形式に墮する弊があるからだ。
○精法　鹽味噌。
○持經　肌身はなさず所有する經卷。
○上座下座　僧は僧の修行の多少を區別する語、出家者剃髮授戒し一夏九旬を勤行せしものを謂と云ふ。

〔九十六〕　めなもみといふ草あり。蝮にさされたる人、かの草を揉みてつけぬれば、すなはち癒ゆとなむ。見知りておくべし。

〔九十七〕　其の物につきて、その物を費し損ふもの、數を知らずあり。身に虱あり。家に鼠あり。國に賊あり。小人に財あり。君子に仁義あり。僧に法あり。

〔九十八〕　たふとき聖のいひおきけることを書きつけて、一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに、心に會ひて覺えし事ども。

一爲やせまし、爲ずやあらましと思ふことは、おほやう爲ぬはよきなり。

一後世を思はむものは、糂汰瓶一つも持つまじきことなり。持經、本尊にいたるまで、よき物を持つ、よしなきことなり。

一遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一上臈は下臈になり、智者は愚者になり、德人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。

一佛道を願ふといふは、別のこと無し、暇ある身になりて、世のこと心にかけぬを、第

○堀河の相國　太政大臣久我雅具、岩倉具實の子。
○たのしき　愉快な快活な人。
○その事となく　それと一定せず何事にとなく。
○過差　奢侈。
○大壺　檢非違使別當の唐名。
○唐櫃　脚のある櫃
○久我の相國　太政大臣久我雅實、源頼房の子。
○まがり　まゆみの木を薄くはいで曲げてつくりし器。
○内侍　節會の時、承明門内の諸事を掌る役。
○内記、中務省の官吏、詔勅を作り禁中の記事などを録す役

一の道とす。

この外も、ありし事ども、覺えず。

〔九十九〕　堀河の相國は、美男のたのしき人にて、その事となく過差を好み給ひけり。御子基俊卿を大理になして、廳務を行はれけるに、廳屋の唐櫃見苦しとて、めでたく作り改めらるべきよし仰せられけるに、この唐櫃は、上古より傳はりて、そのはじめを知らず、數百年を經たり。累代の公物、古弊をもちて規模とす。たやすく改められ難きよし、故實の諸官等申しければ、その事やみにけり。

〔百〕　久我の相國は、殿上にて水を召しけるに、主殿司土器をたてまつりければ、「まがりを參らせよ。」とて、まがりしてぞめしける。

〔百一〕　ある人、任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記のもちたる宣命を取らずして堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、たちかへり取るべきにもあらず、思ひ煩はれけるに、六位の外記康綱、衣被の女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやかに奉らせけり。いみじかりけり。

〔百二〕　尹大納言光忠入道、追儺の上卿を務められけるに、洞院右大臣殿に次第を申し請

○外記、太政官の官大小公事の詔書奏文を案じ局中に記録する役。
○康綱　中原康綱。
○宣命　任大臣の詔命をかいたみことのり。
○尹大納言　源光忠尹は從正三位長官。
○洞院右大臣　藤原實泰、公守の子。
○餌袋　數物、小半桑のうすべり。
○こと〴〵しく　仰山らしく。
○もてしづめたるけはひ　物馴れしさやかなる樣子。
○俄にしも云々　今急に空薰などしたのでない香。

けられければ、「又五郎をのこを師とするより外の才覺候はじ。」とぞ宣ひける。かの又五郎は老いたる衛士の、よく公事に馴れたる者にてぞありける。近衛殿著陣したまひける時、膝突をわすれて、外記をめされければ、火たきて候ひけるが、「まづ膝突をめさるべくや候らむ。」と、忍びやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

〔百三〕　大覺寺殿にて、近習の人ども、謎々をつくりて解かれけるところへ、醫師忠守參りたりけるに、侍從大納言公明卿、「我が朝のものとも見えぬ忠守かな。」となぞ〳〵にせられけるを、唐瓶子と解きて笑ひあはれければ、腹立ちてまかでにけり。

〔百四〕　荒れたる宿の人目なきに、女の憚る事あるころにて、つれ〴〵と籠り居たるを、ある人とぶらひ給はむとて、夕月夜のおぼつかなき程に、忍びて尋ねおはしたるに、犬のこと〴〵しく咎むれば、けす女のいでて、「いづくよりぞ。」といふに、やがて案内せさせて入りたまひぬ。心ぼそげなるありさま、いかで過すらむと、いと心ぐるし。あやしき板敷に、しばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの若やかなるして、「こなたへ。」といふ人あれば、たてあけ所せげなる遣戸よりぞ入りたまひぬる。内のさまはいたくすさまじからず、心にくく、灯はかなたにほのかなれど、ものの綺羅など見えて、俄にしもあらぬにほ

○今宵ぞ云々　ゆっくり熟睡が出来るであらう。ぬべくあるめる。
○うちしきれば、頻りに嘆けば。
○たゆみ給へる々づゝずして居られる
○曙白く　戸の際に夜の明けた色が白く
○有明の月　十六夜以後、遅く出る月が空にあつたまゝで夜のける時、月をか明く云ふ。
○長押　敷居にある横木、下長押の事。
○寝きすまじけれ　話がつきまい。
○かぶし　頭を傾けうなだれた様子。
○はつれ〳〵　折々
○虚空上人　歌人あるので不明。

ひ、いとなつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ。雨もぞふる、御車は門の下に、御供の人は其處々々に。」といへば、「今宵ぞやすきいは寢べかめる。」とうちさゝめくも、忍びたれど、ほどなければほの聞ゆ。さてこの程の事ども、こまやかに聞え給ふに、夜ぶかき鶏も鳴きぬ。來しかた行くすゑかけて、まめやかなる御物語に、この度は鶏も花やかなる聲にうちしきれば、明け離るゝにやと聞きたまへど、夜深く急ぐべきところのさまにもあらねば、すこしたゆみ給へるに、隙白くなれば、忘れ難きことなどいひて、立ち出でたまふに、稍も庭もめづらしく青みわたりたる卯月ばかりのあけほの、艶にをかしかりしをおほし出でて、桂の木の大きなるがかくるゝまで、今も見おくり給ふとぞ。

〔百五〕　北の家かげに消え殘りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轅も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、限なくはあらぬに、人ばなれなる御堂の廊に、なみ〳〵にはあらずと見ゆる男、女と長押に尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらむ、盡きすまじけれ。かぶし、かたちなどいとよしと見えて、えもいはぬ匂ひの、さとかをりたるこそをかしけれ。けはひなど、はつれ〳〵聞えたるもゆかし。

〔百六〕　高野の證空上人京へ上りけるに、細道にて馬に乘りたる女の行きあひたりける

○四部の弟子　四衆とも云ふ、釋迦の弟子の四種。
○優婆塞　俗のまゝなる男の佛弟子。
○優婆夷　俗のまゝの女の佛弟子。
○歌ならぬ身　人數に入らぬ賤しい身。
○堀河内大臣　源具守、岩倉具實の子。
○岩倉　山城愛宕郡岩倉。
○むつかし　こゝでは、やかましい（大仰の意）と解く所たらう。
○淨土寺の前關白　藤原師教、忠教の子。
○安喜門院　後白河帝の女御、藤原有子、公房の女。
○山階左大臣　藤原實雄。

が、口引きける男あしく引きて、聖の馬を堀へ落してけり。聖、いと腹あしく咎めて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり。かくの如くの優婆夷などの身にて、比丘を堀に蹴入れさする、未曾有の惡行なり。」といはれければ、口引きの男「いかに仰せらるゝやらむ、えこそ聞き知らね。」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ。非修非學の男。」とあらゝかに言ひて、きはまりなき放言しつと思ひける氣色にて、馬引きかへして遁けられにけり。たふとかりける評論なるべし。

〔百七〕　女の物いひかけたる返り事、とりあへずよき程にする男は、有りがたきものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房ども、若き男達の參らるゝ毎に、「時鳥や聞き給へる。」と問ひて試みられけるに、某の大納言とかやは、「數ならぬ身はえ聞き候はず。」と答へられけり。堀河内大臣殿は、「岩倉にて聞きて候ひしやらむ。」とおほせられけるを、「これは難なし。數ならぬ身むつかし。」など定めあはれけり。總て男をば、女に笑はれぬ樣におほしたつべしとぞ、淨土寺の前關白殿は、幼くて安喜門院のよく教へまゐらせさせ給ひける故に、御詞などのよきぞと人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、「怪しの下女の見奉

るも、いと恥しく心づかひせらるゝ。」とこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋もじきものぞと思ふに、女の性は皆ひがめり。人我の相ふかく、貪欲甚だしく、物の理を知らず、たゞ迷ひの方に心も早くうつり、詞も巧みに、苦しからぬ事をも問ふ時はいはず、用意あるかと見れば、又あさましき事まで問はずがたりにいひ出す。深くたばかり飾れる事は、男の智慧にも優りたるかと思へば、その事あとより顕はるゝを知らず。質朴ならずして拙きものは女なり。その心に隨ひてよく思はれむことは、心うかるべし。されば何かは女の恥かしからむ。もし賢女あらば、それも物うとく、すさまじかりなむ。たゞ迷ひをあるじとしてかれに隨ふ時、やさしくもおもしろくも覺ゆべきことなり。

〔百八〕　寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚かなるか。愚かにして忘る人の爲にいはば、一錢輕しと雖も、これを累ぬれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。刹那覺えずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期忽ちに到る。されば道人は、遠く日月を惜しむべからず、只今の一念空しく過ぐることを惜しむべし。もし人來りて、わが命明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらむに、今日の暮るゝ

○人我の相　利己的な、人と我とを區別する姿。

○物うとく　好づき難く。

○道人　智度論に「得道者名爲道人」、餘出家者未得道者亦名爲道人」、「佛道に志す人。

○便利　大小便。

○謝靈運　支那晉代の文學者。

○法華の筆受　法華經の飜譯者（事實では漢譯經の譯者であつたと云ふ。）

○風雲の思ひ　自然を愛すること。

○惠遠　支那廬山東林寺の僧、東晉の人、羅道安の弟子。

○白蓮の交はり　惠遠を中心として出來た佛教徒の團體、白蓮社。

○高名の木のぼり　有名な木登り、木登りの名人。

○宣て　命令して

○あやしき下臈　賤しき身分低い者。

○かたき所　蹴にくい所。

聞、何事をか賴み、何事をか營まむ。我等が生ける今日の日、何ぞその時節に異ならむ。一日の中に、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、止む事を得ずして、多くの時を失ふ。その餘りの暇、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事を思惟して、時を移すのみならず、日を消し月をわたりて、一生をおくる、最も愚かなり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲の思ひを觀ぜしかば、惠遠白蓮の交はりをゆるさざりき。しばらくもこれなき時は死人におなじ。光陰何のためにか惜しむとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まむ人は止み、修せむ人は修せよとなり。

〔百九〕　高名の木のぼりといひし男、人を捉てて、高き木にのぼせて梢をきらせしに、いと危く見えしほどはいふこともなくて、おるゝ時に、軒だけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ。」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るゝともおりなむ。如何にかくいふぞ。」と申し侍りしかば、「その事に候。目くるめき枝危きほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちは安き所になりて、必ず仕ることに候。」といふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすくおもへば、必ずおつと侍るやらむ。

〔百十〕　雙六の上手といひし人に、その術を問ひ侍りしかば、「勝たむとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手か疾く負けぬべきと案じて、その手をつかはずして、一めなりとも遲く負くべき手につくべし。」といふ。道を知れるをしへ、身を修め國を保たむ道もまたしかなり。

〔百十一〕　「圍碁雙六このみてあかし暮す人は、四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふ。」とある聖の申ししこと、耳にとゞまりて、いみじくおぼえ侍る。

〔百十二〕　明日は遠國へ赴くべしと聞かむ人に、心しづかになすべからむわざをば、人いひかけてむや。俄の大事をも營み、切に歎くこともある人は、他の事を聞き入れず、人のうれへよろこびをも問はず。問はずとてなどやと恨むる人もなし。されば年もやう〳〵たけ、病にもまつはれ、況んや世をも遁れたらむ人、亦これに同じかるべし。人間の儀式、いづれの事か去り難からぬ。世俗の默し難きに從ひて、これを必ずとせば、願ひも多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雜事の小節にさへられて、空しく暮れなむ。日暮れ道遠し、吾が生既に蹉跎たり、諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を持たざらむ人は、もの狂ひともいへ、現なし、情なしとも思へ、譏るとも苦しま

○雙六　黑白十二の駒、盤の目は十二づつ左右にある、賽をふつて早く先方へ駒全體が行き著いた方が勝ち。
○四重　殺生、偸盜、邪淫、妄語。
○五逆　殺レ父、殺レ母殺二阿羅漢一、破二和合僧一、出二佛身血一。
○日暮れ道遠し云々　唐書白居易傳に「日暮而途遠、吾生已蹉跎。」
○諸緣を放下すべき　世間の關係をひきはなし捨つべき。

じ、譽むとも聞きいれじ。

〔百十三〕　四十にも餘りぬる人の、色めきたる方、自ら忍びてあらむは如何はせむ、言にうち出でて、男女のこと、人の上をもいひ戲るゝこそ、似げなく見ぐるしけれ。大かた聞きにくく見ぐるしき事、老人の若き人にまじはりて興あらむと物いひ居たる、數ならぬ身にて、世のおぼえある人を隔てなきさまにいひたる、貧しきところに酒宴このみ、客人に饗應せむときらめきたる。

〔百十四〕　今出川のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに、水の流れたる所にて、齋王丸御牛を追ひたりければ、足搔の水前板までさゝとかゝりけるを、爲則御車の後に候ひけるが、「希有の童かな。斯る所にて御牛をば追ふものか。」といひたりければ、おほい殿、御氣色あしくなりて、「おのれ車やらむこと、齋王丸に勝りてえ知らじ。希有の男なり。」とて御車に頭をうちあてられにけり。この高名の齋王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人は膝幸、一人は牟槌、一人は胞腹、一人は乙牛とつけられけり。

〔百十五〕　宿河原といふ所にて、ほろ〳〵おほく集りて、九品の念佛を申しけるに、外よ

○色めきたる方　好色らしく見える人。
○如何はせむ　それは如何しよう、詮方がない。
○今出川のおほい殿　菊亭實季、卽ち菊亭の大臣。
○足搔　前足で地をかく事。
○前板　車の前に横たへてある板。
○爲則　お供をした人の名、姓不詳。
○太秦殿　藤原信清、信隆の子。
○料の御牛飼　天皇の御召料たる牛を飼ふ者。
○膝幸、牟槌、胞腹云々　皆牛に緣ある用語らしいが不明。
○宿河原　攝津と云ふ說と武藏と云ふ說がある。
○ほろ〳〵　梵論、虛無僧。
○九品の念佛　九度調子を變へる念佛。

り入りくるほろ〳〵の、「もしこの中に、いろをし坊と申すほろやおはします。」と尋ねければ、その中より、「いろをしこゝに候。かく宣ふは誰ぞ。」と答ふれば、「しら梵字と申す者なり。おのれが師なにがしと申す人、東國にて、いろをしと申すほろに殺されけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、うらみ申さばやとおもひて、尋ね申すなり。」といふ。いろをし、「ゆゝしくも尋ねおはしたり。さる事はべりき。こゝにて對面したてまつらば、道場をけがし侍るべし。前の河原へまゐりあはむ。あなかしこ。わきざしたち、いづ方をも見つぎ給ふな。數多のわづらひにならば、佛事のさまたけに侍るべし。」といひ定めて、二人河原に出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて、共に死にけり。ほろ〳〵といふものは、昔はなかりけるにや。近き世に、梵論字、梵字、漢字などいひける者、そのはじめなりけるとかや。世を捨てたるに似て、我執ふかく、佛道を願ふに似て、鬪諍を事とす。放逸無慚のありさまなれども、死を輕くして少しもなづまざる方のいさぎよく覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。

〔百十六〕　寺院の號、さらぬ萬の物にも名をつくること、昔の人は少しも求めず、唯ありの儘に安くつけけるなり。この頃は、深く案じ、才覺を顯はさむとしたる樣に聞ゆる、い

○心ゆくばかり　思ふ存分。
○なづまざる　拘泥執著しない。
○才覺　才智、自分のはたらき。
○むつかし　こゝでは面倒でうるさい。
○友とするに云々　論語季氏篇にも之に似た益者三友、損者三友がある。

とむつかし。人の名も、目馴れぬ文字をつかむとする、益なき事なり。何事もめづらしき事をもとめ、異說を好むは、淺才の人の必ずあることなりとぞ。

〔百十七〕　友とするに惡きもの七つあり。一には高くやんごとなき人、二には若き人、三には病なく身つよき人、四には酒をこのむ人、五には武く勇める人、六にはそらごとする人、七には慾ふかき人。善き友三つあり。一にはものくるゝ友、二には醫師、三には智惠ある友。

〔百十八〕　鯉のあつもの食ひたる日は、鬢そゝけずとなむ。膠にもつくるものなれば、粘りたる物にこそ。鯉ばかりこそ、御前にても切らるゝものなれば、やんごとなき魚なれ。鳥には雉さうなきものなり。雉松茸などは、御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず。その外は心憂きことなり。中宮の御方の御湯殿の上のくろみ棚に、鴈の見えつるを、北山入道殿の御覽じて、歸らせたまひて、やがて御文にて、「かやうのもの、さながらその姿にて、御棚にゐて候ひしこと、見ならはず。さま惡しきことなり。はか〳〵しき人のさぶらはぬ故にこそ。」など申されたりけり。

〔百十九〕　鎌倉の海にかつをといふ魚は、かの境には雙なきものにて、この頃もてなすも

○病なく身つよき人　健康者は病弱者に同情がないからだ。
○鯉のあつもの云々　脂のため髮も亂れないとの義。
○御前にても云々　天子の御前。
○さうなき　雙び無き、第一。
○御湯殿　料理の間。
○中宮　後深草院の中宮、東二條院。
○くろみ棚　煤で黑くなつた棚。
○北山入道　中宮の御父、西園寺實氏。
○見ならはず　見馴れず。
○はか〳〵しき人　はつきりした人、敏腕家、物のわかる人、役に同じ話がある、之は身分ある人。

のなり。それも鎌倉の年寄の申し侍りしは、「この魚おのれ等若かりし世までは、はかゞしき人の前へ出づること侍らざりき。頭は下部も食はず、切りて捨て侍りしものなり。」と申しき。かやうの物も、世の末になれば、上さままでも入りたつわざにこそ侍れ。

〔百二十〕　唐の物は、薬の外はなくとも事かくまじ。書どもは、この國に多くひろまりぬれば、書きも寫してむ。もろこし船の、たやすからぬ道に、無用のものどものみ取り積みて、所狹く渡しもて來る、いと愚かなり。遠きものを寶とせずとも、また得がたき寶をたふとまずとも、書にも侍るとかや。

〔百二十一〕　養ひ飼ふものには馬、牛。繋ぎ苦しむるこそ痛ましけれど、なくて叶はぬ物なれば、如何はせむ。犬は守り防ぐつとめ、人にも優りたれば、必ずあるべし。されど家毎にあるものなれば、ことさらに求め飼はずともありなむ。その外の鳥獣、すべて用なきものなり。走る獣は檻にこめ、鎖をさされ、飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ野山を思ふ愁へやむ時なし。その思ひ我が身にあたりて忍び難くば、心あらむ人これを樂しまむや。生を苦しめて目を喜ばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林に樂しぶを見て逍遙の友としき。捕へ苦しめたるにあらず。凡そ珍しき鳥、怪しき獣、

○入りたつ　入込む
○遠きもの　尚書旅獒篇に「不レ寶二遠物一、則遠人格」
○得がたき寶　老子に「不レ貴二難レ得之貨一、使二民不レ爲レ盜。」
○桀紂が心　夏の桀王、殷の紂王、共に暴虐無道で有名な王。
○王子猷　支那晉代の人、名は獻之、王羲之の子。
○珍しき鳥、あやしき獣云々　尚書旅獒篇に「珍禽奇獸不レ育二于國一。」

國に養はずとこそ文にも侍るなれ。

〔百二十二〕　人の才能は、文明らかにして、聖の教へを知れるを第一とす。次には手かく事、旨とする事はなくとも、これを習ふべし。學問に便りあらむ爲なり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝のつとめも、醫にあらずばあるべからず。次に弓射、馬に乘る事、六藝に出せり。必ずこれを兼ぬべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばむをば、いたづらなる人といふべからず。次に、食は人の天なり。よく味ひをとゝのへ知れる人、大きなる德とすべし。次に細工、よろづの要多し。この外の事ども、多能は君子のはづるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世には、これをもちて世を治むること、漸くおろかなるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きに如かざるがごとし。

〔百二十三〕　無益の事をなして時を移すを、愚かなる人とも、僻事する人ともいふべし。國の爲君の爲に、止む事を得ずしてなすべき事多し。その餘りの暇、いくばくならず思ふべし。人の身に止む事を得ずして營む所、第一に食ひ物、第二に著る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。飢ゑず、寒からず、風雨に冒されずして、しづか

○旨とする事　專門にする事。
○六藝　支那の教養ある者の修めた六科禮、樂、射、御、書、數。
○いたづらなる人　無駄な事をする人。
○食は人の天なり　書經に「夫食爲二人天一」天が人を養ふからだた。
○多能云々　論語に「吾少也賤、故多二能鄙事一。君子多乎不レ多也。」

○是法法師　倫好と同時代の僧にして歌人。
○淨土宗に恥ぢず　同宗中謹にも逸色なきを云ふ。
○學匠をたてず　學者ぶらない。
○あれほど唐の狗に似候ひなむ云々　唐の狗は狆で、涙を絮えや流へて居るが、此の僧も自ら認經に感激して涙を流して居る點が狆に似て居たのである。
○二方は刃つきたる　朋方に刃のある刀で振り上ゆると自分の頸を斬るといふのである。

に過すを樂しみとす。但し人皆病あり。病に冒されぬれば、その愁へ忍び難し。醫療を忘るべからず。藥を加へて、四つの事、求め得ざるを貧しとす。この四つの外を求め營むを驕とす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせむ。

〔百二十四〕　是法法師は、淨土宗に恥ぢずと雖も、學匠をたてず、たゞ明暮念佛して、やすらかに世を過すありさま、いとあらまほし。

〔百二十五〕　人に後れて、四十九日の佛事に、ある聖を請じ侍りしに、說法いみじくして皆人涙を流しけり。導師かへりて後、聽聞の人ども、「いつよりも殊に今日は尊くおぼえ侍りつる。」と感じあへりし返り事に、ある者の曰く、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなむ上は。」といひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。また人に酒勸むるとて、「おのれまづたべて人に強ひ奉らむとするは、劍にて人を斬らむとするに似たる事なり。二方に刃つきたるものなれば、もたぐる時、まづ我が頸を斬るゆゑに、人をばえ斬らぬなり。おのれまづ醉ひて臥しなば、人はよも召さじ。」と申しき。劍にて斬り試みたりけるにや。いとをかしかりき。

〔百二十六〕　「博奕の負け極まりて、殘りなくうち入れむとせむに、逢ひては打つべからず。立ち歸りつゞけて勝つべき時の至れると知るべし。その時を知るを、よき博奕といふなり。」と、あるもの申しき。

○殘りなく打ち入れむ云々　殘つて居る持物全體を賭けんとするに出遭つたなら
○立歸り　遂に今まで負けた方が。
○雅房大納言　源雅房、定實の子。
○思しける　院のお考へ。
○院　後宇多院。
○中垣　家と家とのしきりの垣。
○うとましく　いとはしく。
○思はずなれど　意外だが。
○不便　不都合。
○畜生殘害　鳥獸が互にそこなひ食ひ合ふこと。
○有情　生物。

〔百二十七〕　改めて益なきことは、改めぬをよしとするなり。

〔百二十八〕　雅房大納言は、才賢く善き人にて、大將にもなさばやと思しける頃、院の近習なる人、「只今淺ましき事を見侍りつ。」と申されければ、「何事ぞ。」と問はせ給ひけるに、「雅房卿鷹に飼はむとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ。」と申されけるに、うとましく、にくくおぼしめして、日ごろの御氣色もたがひ、昇進もしたまはざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足はあとなき事なり。虛言は不便なれども、かゝる事を聞かせ給ひて、にくませ給ひける君の御心は、いと尊きことなり。大かた生けるものを殺し、痛め、鬪はしめて遊び樂しまむ人は、畜生殘害の類なり。萬の鳥獸、小さき蟲までも、心をとめてありさまを見るに、子をおもひ親をなつかしくし、夫婦を伴ひ、妬み、怒り、慾おほく、身を愛し、命を惜しめる事、偏に愚擬なるゆゑに、人よりも勝りて甚だし。かれに苦しみを與へ、命を奪はむ事、いかでか痛ましからざらむ。すべて一切の有情を見て慈悲の心なからむは、人倫にあらず。

○顔回　顔淵。孔子の門弟。
○志人に勞を施さじ　論語公冶長篇に「顔淵曰願無伐善、無施勞。」
○大人しき人　大人の相　皆在せる如く見ゆる現象。
○藥を飲みて汗を求むる云々　文選養生論に「夫服藥求汗、或有服而無、面熏情一集、渙然流離。」
○凌雲の額　三國志に「魏明帝立凌雲觀、親光初棟、乃以羅盛辛諶、轤磙引上之、去地二十五丈、既下、顧安皓然。」
○物に爭はず　論語に「君子無所爭。」

〔百二十九〕　顔回は、志人に勞を施さじとなり。すべて人を苦しめ、物を虐ぐる事、賤しき民の志をも奪ふべからず。又幼き子を賺し嚇し、言ひ辱しめて興ずることあり。大人しき人は、まことならねば事にもあらず思へど、幼き心には、身にしみて恐ろしく、恥しく、あさましき思ひ、誠に切なるべし。これを惱して興ずる事、慈悲の心にあらず。大人しき人の、喜び怒り哀れび樂しぶも、皆虛妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身を破るよりも、心を痛ましむるは、人を害ふ事なほ甚だし。病を受くる事も、多くは心より受く。外より來る病は少なし。藥を飲みて汗を求むるには、驗なき事あれども、一旦恥ぢ恐るゝことあれば、かならず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりし例なきにあらず。

〔百三十〕　物に爭はず、己を枉げて人に從ひ、我が身を後にして、人を先にするには如かず。萬のあそびにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらむ爲なり。己が藝の勝りたる事をよろこぶ。されば負けて興なく覺ゆべきこと、また知られたり。我負けて人を歡ばしめむと思はば、さらに遊びの興なかるべし。人に本意なく思はせて、わが心を慰めむこと、德に背けり。むつましき中に戲るゝも、人をはかり欺きて、おのれが智の勝りたることを興とす。これまた禮にあらず。さればはじめ興宴より起りて、長き恨みを結ぶ類おほし。これ皆あらそひを好む失なり。人に勝らむことを思はば、たゞ學問して、その智を人に勝らむと思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、ともがらに爭ふべからずといふ事を知るべきゆゑなり。大きなる職をも辭し、利をも捨つるは、たゞ學問の力なり。

○ともがらに　同輩
○財をもて禮とし云云　曲禮に「雲者不以財爲禮、老者不以筋力爲禮」とあるのを表現をかへたのである。
○鳥羽殿　白河上皇の應德三年建立、所謂鳥羽の離宮。
○元良親王　陽成帝第一皇子、三品兵部卿。
○元日の奏賀　元日辰刻(午前八時)天子大極殿に臨御、羣臣慶賀を奏すること。
○李部王の記　醍醐帝の皇子式部卿重明親王の著書、李部は式部卿の唐名。
○東宮　東枕、論語に「侯君視之、東首加朝服、拖紳。」

〔百三十一〕　貧しきものは財をもて禮とし、老いたるものは力をもて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は速かにやむを智といふべし。許さざらむは人のあやまりなり。分を知らずして强ひて勵むは、おのれがあやまりなり。貧しくして分を知らざれば盜み、力衰へて分を知らざれば病をうく。

〔百三十二〕　鳥羽の作り道は、鳥羽殿建てられて後の號にはあらず、昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲はなはだ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作り道まできこえけるよし、李部王の記に侍るとかや。

〔百三十三〕　夜の御殿は東御枕なり。大かた東を枕として陽氣を受くべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕、常のことなり。白河院は北首に御寢なりけり。「北は忌むことなり。又伊勢は南なり。太神宮の御方を御跡にせさせ給ふ事いかゞ。」と人

○高倉院　山城愛宕郡清閑寺。

○愛樂　愛し好かれる。

○　堪の藝　堪能ならぬ藝。

○堪能の座　上手な者ばかりの一座。

○壯なる人　曲禮に「三十曰壯。」

○資季　藤原資季、資家の子。

申しけり。たゞし太神宮の遙拜は辰巳に向はせたまふ、南にはあらず。

〔百三十四〕　高倉院の法華堂の三昧僧何某の律師とかやいふ者、ある時鏡を取りて顏をつくづくと見て、我が貌の醜くあさましき事を、餘りに心憂く覺えて、鏡さへうとましき心地しければ、その後長く鏡を恐れて、手にだに取らず、更に人に交はる事なし。御堂の勸め許りにあひて、籠り居たりと聞き傳へしこそ、あり難く覺えしか。かしこけなる人も人の上をのみ計りて、己をば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふ理あるべからず。されば、己を知るを、物知れる人といふべし。貌醜けれども知らず、心の愚かなるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非をも知らねば、まして外の譏りを知らず。たゞし貌は鏡に見ゆ、年は數へて知る。我が身の事知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりとぞいはまし。貌を改め齡を若くせよとにはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞ閑に身をやすくせざる。行ひ愚かなりと知らば、何ぞこれを思ふ事これにあらざる。すべて人に愛樂せられずして衆に交はるは恥なり。貌みにくく心おくれにして出で仕へ、無智

○具氏宰相中將　源具氏、通氏の子、宰相は宰議の異稱。

○あらがひ給へ　爭ひ給へ。

○はか〳〵しき事　むづかしい事。

○そゞろごと　たはいもなき事。

○あきらめ申さむ　說明しよう。

○馬のきつりやう云云　「馬退きつ」で此の缶字を除き「りやうきつにのなか」の九字が「中四れ入り」で最初のりと最後のかを除いて曾陷落しその「りか」が「ぐれんだう」で顚倒する、即ち厭と云ふ答を尊る謎である。

にして大才に交はり、不堪の藝をもちて堪能の座に連なり、雪の頭を戴きて壯りなる人にならび、況んや及ばざることを望み、叶はぬことを憂へ、來らざる事を待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず、貪る心に引かれて、自ら身を恥しむるなり。貪ることのやまざるは、命を終ふる大事今こゝに來れりと、たしかに知らざればなり。

〔百三十五〕　資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將に逢ひて、「わぬしの問はれむ程の事、何事なりとも答へ申さざらむや。」といはれければ、具氏、「いかゞ侍らむ。」と申されけるを、「さらば、あらがひ給へ。」といはれて、「はか〳〵しき事は、片端もまねび知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそゞろごとの中に、覺束なき事をこそ問ひ奉らめ。」と申されけり。「まして、こゝもとの淺きことは、何事なりともあきらめ申さむ。」といはれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。おなじくは御前にて爭はるべし。負けたらむ人は供御をまうけらるべし。」と定めて、御前にて召し合せられたりけるに、具氏、「幼くより聞きならひ侍れど、その心知らぬこと侍り。馬のきつりやうきつにのをか、なかくほれいりぐれんどうと申すことは、いかなる心にかはべらむ。承らむ。」と申されけるに、大納言入道はたとつまりて、「これは、そゞろごとなれば、云ふにも足ら

○所課　課せられたもの、罰金として御騎走。
○故法皇　花山院。
○本草　支那の古い植物學の書。
○六條の故内府　内大臣源有房。
○土偏に候　塵の俗字迹で答へたのだ。
○隈なき　曇なき。
○雨にむかひて云々　和漢朗詠集の「雨ノ月無」雨序」の心を採つた。
○春のゆくへ知らぬ　「だれこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり」（古今集）の意。
○詞書　歌の題としてやゝ長き文章となり居るもの、はし書。

ず。」といはれけるを、「もとより、深き道は知り侍らず。そゞろ言を尋ね奉らむと、定め申しつ。」と申されければ、大納言入道負けになりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

〔百三十六〕　醫師あつしげ、故法皇の御前に候ひて、供御の參りけるに、「今參り侍る供御のいろ〳〵を、文字も功能も尋ね下されて、そらに申しはべらば、本草に御覽じあはせられ侍れかし。一つも申し誤り侍らじ。」と申しける時しも、六條故内府まゐり給ひて、「有房ついでに物習ひ侍らむ。」とて、「まづ、しほといふ文字は、いづれの偏にか侍らむ。」と問はれたりけるに、「土偏に候。」と申したりければ、「才のほど既に現はれにたり。今はさばかりにて候へ、ゆかしきところなし。」と申されけるに、とよみになりて、罷り出でにけり。

〔百三十七〕　花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころおほけれ。歌の詞書にも、「花見に罷りけるにはやく散り過ぎにければ。」とも、「さはることありて罷らで。」なども書けるは、「花を見て。」といへるに劣れる事かは。花の散り月の傾くを慕ふ習ひはさる事なれど、殊に頑なる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし。」などはいふめる。萬の事も始め終りこそをかしけれ。男女の情

○あだなる契り　はかない契り。
○遠き雲居　遠い所、遠く離れた戀人。
○淺茅が宿　荒れはてたる宿。
○青みたる樣にて　明け方のほの青いやうな月。
○椎柴　櫧の木の茂り。
○色濃く　しつこく、あくどく。
○ねぢより　ねぢり寄り、强ひて近寄る。
○あからめもせず　わき目もせず。
○まもり　注目する。
○見ごと　見る甲斐、見る目的物。

も、偏に逢ひ見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さをおもひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとり明し、遠き雲居を思ひやり、淺茅が宿に昔を忍ぶこそ、色好むとはいはめ。望月の隈なきを、千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心ふかう、青みたる樣にて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしう覺ゆれ。すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。よき人は、偏にすける樣にも見えず、興ずる樣もなほざりなり。片田舍の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きなる枝心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、萬の物、よそながら見る事なし。さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごとといとおそし。そのほどは棧敷不用なり。」とて、奥なる屋にて、酒飲みもの食ひ、圍碁雙六など遊びて、棧敷には人をおきたれば、「わたり候。」といふときに、おの〳〵肝つぶるやうに爭ひ走りあがりて、落ちぬべきま

○とわりかゝり　何のかのと。
○及びかゝらず　及び腰になり、後から前の人にのりかゝらず。
○わりなく　無理に
○裝かけ渡して　賀茂の祭には裝の葉を簾、柱、或は衣服にまでかけた。
○きら〳〵し　華美で輝くさま。
○らうがはしさ　亂りがはしさ、亂雜。
○こゝら　澤山。
○待ちつけ　待つて居出て遊ぶ事が出來る、死を意味する。
○赤岡　上京蓮華寺の東の岡、鳥部野と共に墓地。

で、簾張りいでて、押しあひつゝ、一事も見洩らさじとまもりて、とありかゝりと物事にいひて、渡り過ぎぬれば、「又渡らむまで。」といひて降りぬ。唯物をのみ見むとするなるべし。都の人のゆゝしけなるは、眠りていとも見ず。若く末々なるは、宮仕へに立ち居、人の後にさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。何となく葵かけ渡してなまめかしきに、明けはなれぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、其か彼かなどおもひよすれば、牛飼下部などの見知れるもあり。をかしくも、きら〳〵しくも、さま〴〵に行きかふ、見るもつれ〴〵ならず。暮るゝ程には、立て並べつる車ども、所なく並みゐつる人も、いづかたへか行きつらむ、程なく稀になりて、車どものらうがはしさも濟みぬれば、簾疊も取り拂ひ、目の前に寂しげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られて哀れなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ、かの棧敷の前をこゝら行きかふ人の、見知れるが數多あるにて知りぬ、世の人數もさのみは多からぬにこそ。この人皆失せなむ後、我が身死ぬべきに定まりたりとも、程なく待ちつけぬべし。大きなる器に水を入れて、細き孔をあけたらむに、滴る事少しと云ふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならむや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數おほかる日はあれど、送らぬ日はなし。されば柩を擁ぐもの、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、ありがたき不思議なり。暫しも世をのどかに思ひなむや。まゝ子立といふものを、雙六の石にてつくりて、立て並べたる程は、取られむ事いづれの石とも知らねども、數へ當ててひとつを取りぬれば、その外は遁れぬと見れど、また〳〵かぞふれば、かれこれ間抜き行くほどに、いづれも、遁れざるに似たり。兵の軍にいづるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。世をそむける草の庵には、しづかに水石をもてあそびて、これを他所に聞くと思へるは、いとはかなし。しづかなる山の奥、無常の敵きほひ來らざらむや。その死に臨めること、軍の陣に進めるにおなじ。

〔百三十八〕　祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の、御簾なるを皆取らせられ侍りしが、色もなくおほえ侍りしを、よき人のし給ふことなれば、さるべきにやと思ひしかど、周防の内侍が、

かくれどもかひなき物はもろともにみすの葵の枯葉なりけり

○まゝ子立　黑白の石を長方形に並べ、印したる石から十に當る石をとり除くと最後に唯一つ殘る遊戯。
○水石　泉水庭石、庭いぢり、盆栽いぢりの意味。
○色もなく　趣味もなく。
○周防の内侍　平棟仲の女、仲子、白川院の内侍、父が周防守からかく名乘つた
○かくれども　云々　葵をかけて隱くがと心をかけて墓ふがの意、みすは御簾と見すとをかけた、葵と逢ふ日と、枯葉と離れとをかけたのである。

○母屋　家の中央の間。
○鴨長明　鴨社の禰宜長継の子和歌所寄人、方丈記の著者。
○玉だれに云々「玉だれに後の葵はとまりけり枯れても通へ人の面影」和泉式部の歌。
○枇杷の皇太后宮　藤原道長の女研子。
○三條帝の中宮。
○をりならぬ云々「あやめ草涙のたまにぬきかへて」が上句、千載集源傷都に出づ。
○あやめの草は云々「玉ぬきしあやめの草はありながら復殿は荒れむ物とやは見し」同じく千載集。
○こちたく　くどく

と詠めるも、母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉を詠めるよし、家の集に書けり。古き歌の詞書に、「枯れたる葵にさしてつかはしける。」ともはべり。枕草紙にも、「來しかた戀しきもの。かれたる葵。」と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひよりたれ。鴨長明が四季物語にも、「玉だれに後の葵はとまりけり。」とぞ書ける。己と枯るゝだにこそあるを、名殘なくいかゞ取り捨つべき。御帳にかゝれる藥玉も、九月九日菊にとりかへらるゝといへば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ。枇杷の皇太后宮かくれ給ひて後、ふるき御帳の内に、菖蒲藥玉などの枯れたるが侍りけるを見て、「をりならぬ根をなほぞかけつる。」と、辨の乳母のいへる返り事に、「あやめの草はありながら。」とも、江の侍從が詠みしぞかし。

〔百三十九〕　家にありたき木は、松、櫻。松は五葉もよし。花は一重なるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆一重にてこそあれ。八重櫻は異樣のものなり。いとこちたくねぢけたり。植ゑずともありなむ。遲櫻またすさまじ。蟲のつきたるもむつかし。梅は白き、うす紅梅、一重なるが疾く咲きたるも、重なりたる紅梅の、匂ひめでたきも、みなをかし。「おそき梅は、櫻に咲きあひて、おほえ劣り、けおされて、枝に萎みつきたる、心憂し。一重なるがまづ咲きて散りたるは、心疾くをかし。」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなむ軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本はべるめり。柳またをかし。卯月ばかりの若楓、すべて萬の花紅葉にも優りてめでたきものなり。橘、桂、何れも木は物古り、大きなる、よし。草は山吹、藤、杜若、撫子。池には蓮。秋の草は荻、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫菀、吾木香、刈萱、龍膽、菊、黃菊も、蔦、葛、朝顏、いづれもいと高からず、さゝやかなる垣に、しけからぬよし。この外世にまれなるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。大かた何も珍しくありがたきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうの物なくてありなむ。

〔百四十〕　身死して財殘ることは、智者のせざるところなり。よからぬもの蓄へおきたるも拙く、よきものは、心をとめけむとはかなし。こちたく多かる、まして口惜し。我こそ得めなどいふものどもありて、あとに爭ひたる、樣惡し。後は誰にと志すものあらば、生けらむ中にぞ讓るべき。朝夕なくて協はざらむ物こそあらめ、その外は何も持たでぞあらまほしき。

〔百四十一〕　悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、雙なき武者なり。故鄕

○京極入道中納言　藤原定家、俊成の子。
○若楓　楓の若葉。
○はかなし　氣の毒
○樣惡し　醜い。
○悲田院　京都鴨川の西に在り、京中の病者孤兒を收容して施療する所。
○堯蓮上人　盛に記してある外、傳不詳。
○雙なき　ならびない。

○言受け　言承、承諾。
○けやけく　きつゆり、きはだち。
○乏しくかなはぬ　貧乏で深切心はあつても實行の出來ぬ。
○賑ひ豊か　富み足る。
○靡うちゆがみ　言語が飽つて。
○荒夷　東國邊の荒い田舎武士。
○傍　傍の者。
○物のあはれ　人情の機微。
○ものし　こゝでは憎ありませうの意。

の人の來りて物がたりすとて、「吾妻人こそいひつることは頼まるれ。都の人は言受けのみよくて、實なし。」といひしを、聖、「それはさこそ思すらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに情あるゆゑに、人のいふほどの事、けやけく辭びがたく、よろづぇ言ひはなたず、心弱くことうけしつ。傷せむとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意通らぬこと多かるべし。吾妻人は我がかたなれど、けには心の色なく、情おくれ、偏にすくよかなるものなれば、初めより否といひて止みぬ。賑ひ豊かなれば、人には頼まるゝぞかし。」とことわられ侍りしこそ、この聖、辭うちゆがみあら〳〵しくて、聖教のこまやかなる理、いと辨へずもやと思ひしに、この一言の後、心憎くなりて、多かる中に、寺をも住持せらるゝは、かく和ぎたるところありて、その益もあるにこそと覺え侍りし。

〔百四十一〕　心なしと見ゆる者も、よき一言はいふ者なり。ある荒夷の恐ろしげなるが、傍にあひて、「御子はおはすや。」と問ひしに、「一人も持ち侍らず。」と答へしかば、「さては物のあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらむと、いと恐ろし。子故にこそ、萬の哀れは思ひ知らるれ。」といひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝ

○するすみ　匹如身人の一物をも手に持たぬを云ふ。
○かたしからむ　いとほしい、憐愍の。
○人恒の產なき時　孟子に「無恒產而有恒心者惟士爲能若民則無恒產因無恒心」とある、恒產は日常の生業、生活す可き財産。
○凍餒　こゞえる事と餓える事と。
○終焉　臨終、死際。
○相　かたち、現象。
○變化　權現と同じく、かりに神佛が此の世に人と化して衆生濟度をする、その化した者。
○違ふ所なくは　自分の心術が正しくて道にはづれた所なくは。

るものの心に慈悲ありなむや。孝養の心なき者も、子持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ。世をすてたる人のよろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづに詔ひ、望み深きを見て、無下に思ひくたすは、僻事なり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからむ親のため妻子のためには、恥をも忘れ、盜みもしつべき事なり。されば盜人を縛め、僻事をのみ罪せむよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の產なき時は恒の心なし。人窮りて盜みす。世治らずして凍餒の苦しみあらば、科のもの絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはむこと、不便のわざなり。さていかゞして人を恵むべきとならば、上の奢り費すところを止め、民を撫で、農を勸めば、下に利あらむこと疑ひあるべからず。衣食世の常なる上に、ひがごとせむ人をぞ、まことの盜人とはいふべき。

〔百四十三〕　人の終焉の有樣のいみじかりし事など、人の語るを聞くに、たゞ「靜かにして亂れず。」といはば心にくかるべきを、愚かなる人は、怪しく異なる相を語りつけ、いひし言も驚止も、おのれが好む方に譽めなすこそ、その人の日ごろの本意にもあらずやと覺ゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず、おのれ違ふ所

なくば、人の見聞くにはよるべからず。

〔百四十四〕 栂尾の上人道を過ぎたまひけるに、河にて馬洗ふ男、「あし〳〵。」といひければ、上人たちとまりて、「あなたふとや。宿執開發の人かな。阿字々々と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりにたふとく覺ゆるは。」と尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候。」と答へけり。「こはめでたきことかな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結緣をもしつるかな。」とて、感涙を拭はれけるとぞ。

〔百四十五〕 御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を、「落馬の相ある人なり。よく〳〵慎み給へ。」といひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願馬より落ちて死ににけり。「道に長じぬる一言、神の如し。」と人おもへり。さて、「いかなる相ぞ。」と人の問ひければ、「極めて桃尻にて、沛艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申し誤りたる。」とぞいひける。

〔百四十六〕 明雲座主、相者に逢ひ給ひて、「己若し兵仗の難やある。」と尋ねたまひければ、相人、「實にその相おはします。」と申す。「いかなる相ぞ。」と尋ね給ひければ、「傷害の恐れおはしますまじき御身にて、假にもかく思しよりて尋ね給ふ。これ既にそのあやぶみの

○栂尾の上人　際高辨、明恵（或は明慧）上人といふ、北山の栂尾に居て華嚴宗中興の祖と仰がれた。
○あし〳〵　足を洗ふため足と云つたのを阿字と聞いた。
○宿執開發の人　前世で修めた功德が現世で現れた人。
○府生殿　六衛府等に屬する官、不生と上人が聞き間違へたのだ。
○阿字本不生　眞言宗で阿字に不生不滅の眞理があると觀ずる、夫が阿字本不生。
○桃尻　鞍上で尻の落ちつかぬ事。
○沛艾　馬逞しく躍り上る形容。
○明雲座主　比叡山の座主明雲。源頼通の子。座主は延暦寺の長老の稱。
○相者　人相見。
○相人　相者と同意。
○兵仗の難　所謂劍難、武器で死ぬ相。
○思しよりて　思ひついて。

兆なり。」と申しけり。はたして矢にあたりてうせ給ひにけり。

〔百四十七〕 灸治あまた所になりぬれば神事に穢れありといふこと、近く人のいひ出せるなり、格式等にも見えずとぞ。

〔百四十八〕 四十以後の人、身に灸を加へて三里を燒かざれば上氣のことあり、必ず灸すべし。

〔百四十九〕 鹿茸を鼻にあてて嗅ぐべからず、ちひさき蟲ありて、鼻より入りて腦をはむといへり。

〔百五十〕 能をつかむとする人、「よくせざらむ程は、なまじひに人に知られじ、内々よく習ひ得てさし出でたらむこそ、いと心にくからめ。」と常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひ得ることなし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、譏り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なければ、道になづまず妄りにせずして、年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位にいたり、德たけ人に許されて、ならびなき名をうることなり。天下の物の上手といへども、はじめは不堪のきこえもあり、無下の瑕瑾もありき。されどもその人、道の掟正しく、これを重くして放埒せざれ

○神事に穢れ　灸が多いと神のお祭なぜに穢れとなる事。
○格式　法令規則を書いた書。
○三里　膝下外方の凹める所。
○鹿茸　鹿の袋角。
○瑕瑾　美玉の疵、轉じて一般の缺點。
○放埒　馬を埒外に放つ如く　任意に遊び廻る意。

○曇天なからずして　少し位分った程度に調適して。
○西大寺　大和添上郡にある、奈良七大寺の一。
○靜然上人　傳不詳
○西園寺内大臣　實衡、公衡の子。
○資朝　藤原資朝。俊光の子、日野中納言と云ふ。
○毛いさらはひて　毛衰し禿せ骨立ちて
○旭犬　むく毛犬。
○爲兼　藤原爲兼、定家三代の孫。
○六波羅　京都淀東鳥羽郷一帶の總稱。
○東寺　今京都下京九條、教王護國寺、朱雀門の東なれば此の名稱がある。

ば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。

〔百五十一〕　ある人の曰く、年五十になるまで上手に至らざらむ藝をば捨つべきなり。勵み習ふべき行末もなし。老人のことをば人もえ笑はず、衆に交ばりたるも、あひなく見苦し。大方萬のしわざは止めて、暇あるこそ目安くあらまほしけれ。世俗の事にたづさはりて、生涯を暮すは下愚の人なり。ゆかしく覺えむことは學び聞くとも、その趣を知りなば、覺束なからずして止むべし。もとより望む事なくしてやまむは、第一のことなり。

〔百五十二〕　西大寺靜然上人、腰かゞまり眉白く、誠に德たけたる有樣にて、内裏へ參られたりけるを、西園寺内大臣殿、「あな尊との氣色や。」とて信仰の氣色ありければ、資朝卿これを見て、「年のよりたるに候。」と申されけり。後日に、尨犬の淺ましく老いさらほひて毛はけたるをひかせて、「この氣色尊く見えて候。」とて内府へ參らせられたりけるとぞ。

〔百五十三〕　爲兼大納言入道めしとられて、武士ども打ち圍みて、六波羅へ率て行きければ、資朝卿、一條わたりにてこれを見て、「あな羨し。世にあらむおもひで、かくこそ有らまほしけれ。」とぞいはれける。

〔百五十四〕　この人、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、かたは者ども集り居たるが、

○うち反り　身體のそり返り。
○機嫌　時機、都合。
○ついで　場合。
○生住異滅　生は產、住は居所、異は病にかゝつて異形になること、滅は死亡。
○眞俗　眞諦と俗諦と、眞理と俗世間、佛道も俗事にても。
○小春　陰曆十月頃一時春の如く暖くなる折を云ふ。

手も足もねぢゆがみうち反りて、いづくも不具に異樣なるを見て、「とり〴〵に類なきくせ者なり、最も愛するに足れり。」と思ひて、まもり給ひけるほどに、やがてその興つきて、見にくくいぶせく覺えければ、「たゞすなほに珍しからぬものには如かず。」と思ひて、歸りて後、「この間植木を好みて、異樣に曲折あるを求めて目を喜ばしめつるは、かのかたは者を愛するなりけり。」と、興なく覺えければ、鉢に栽ゑられける木ども、みなほり棄てられにけり。さもありぬべきことなり。

〔百五十五〕　世に從はむ人は、まづ機嫌を知るべし。序惡しき事は、人の耳にも逆ひ、心にも違ひて、その事成らず、さやうの折節を心得べきなり。但し病をうけ、子うみ、死ぬる事のみ、機嫌をはからず　ついでとして止む事なし。生住異滅の移り變るまことの大事は、たけき河の漲り流るゝが如し。しばしも滯らず、直ちに行ひゆくものなり。されば眞俗につけて、かならず果し遂げむとおもはむことは、機嫌をいふべからず。とかくの用意なく、足を踏みとゞむまじきなり。春暮れて後夏になり、夏果てて秋の來るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅も莟みぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちてめぐむにはあらず、下よ

○つはる　衒張る、華ぐみきずす。
○下に設けたる　下で支度してゐる。
○待ち取る序　それを待ち受ける順序。
○大臣の大饗　任大臣の披露式。
○宇治左大臣　藤原頼長、所謂頼左府、忠實の子、忠通の弟。
○東三條殿　二條の南町の西に在る御殿
○させる事のよせ　大した錢積き。
○女院　陽はの後門に入られし嫁稱。
○沓を云ふ　支那で博奕の事を云ふ、囲碁。
○善業　美果を得べき美しき業因　業は因果の關係の働き。
○繩床　繩を張つた椅子、座禪工夫の座
○禪定　無我の境に入る事。　禪三昧に入る事。
○事理　事は外にあらはれた所作、理は心の内の所作、現象と實在。
○外相　外に現はれたすがた、現象。
○内證　心内の妙悟

り萌しつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣下に設けたる故に、待ち取る序、甚だ早し。生老病死の移り來る事、又これに過ぎたり。四季はなほ定まれる序あり。死期は序を待たず。死は前よりしも來らず、かねて後に迫れり。人みな死ある事を知りて、待つ事しかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟遠かなれども、磯より潮の滿つるが如し。

〔百五十六〕　大臣の大饗は、さるべき所をまをし受けて行ふ、常のことなり。宇治左大臣殿は、東三條殿にて行はる。内裏にてありけるを申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させる事のよせなけれども、女院の御所など借り申す故實なりとぞ。

〔百五十七〕　筆をとれば物書かれ、樂器をとれば音をたてむと思ふ。杯をとれば酒を思ひ、賽をとれば攤うたむ事を思ふ。心は必ず事に觸れて來る。假にも不善のたはぶれをなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むる事もあり。假に今この文をひろげざらましかば、この事を知らむや。これすなはち觸るゝ所の益なり。心更に起らずとも、佛前にありて數珠を取り經を取らば、怠るうちにも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、おぼえずして禪定なるべし。事理もとより二つならず、外相若し背かざれば、内證かならず熟す。強ひて

○凝宮云々　凝宮と魚道と似た發音なので、倦野が間違へて居たのである。
○みなむすび　紐の結び方、裘袴裾などに用ゐる飾り。
○二品禪門　世尊寺行忠、行尹の子。
○平張　日蔽ひのため上に平に張る幕。
○清閑寺の僧正　東山にあり清閑寺の道我僧正。
○冬至　日の最も短い時、通常十二月二十二日頃。
○時正　春の彼岸の中日、春夜平分の時。
○立春　冬から春になる日、陰暦正月の始め通常二月三四日
○遍照寺　嵯峨廣澤にあつた寺。
○承仕　寺の事編れ法事の雜役をする役

不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。

〔百五十八〕　「杯の底を捨つることはいかゞ心得たる。」とある人の尋ねさせ給ひしに、「凝宮と申し侍れば、底に凝りたるを捨つるにや候らむ。」と申し侍りしかば、「さにはあらず、魚道なり。流れを殘して口のつきたる所をすゝぐなり。」とぞ仰せられし。

〔百五十九〕　「みなむすびといふは、絲をむすびかさねたるが、蜷といふ貝に似たればいふ。」と或やんごとなき人、仰せられき。「にな」といふは誤りなり。

〔百六十〕　「門に額かくるを、『うつ』といふはよからぬにや。勘解由小路二品禪門は、『額かくる』とのたまひき。見物の『棧敷うつ』もよからぬにや。『平張うつ』などは常の事なり。棧敷構ふるなどいふべし。『護摩たく』といふもわろし。『修する』『護摩する』などいふなり。『行法』も、『法』の字を清みていふ、わろし、濁りていふ。」と清閑寺僧正仰せられき。常にいふ事にかゝることのみ多し。

〔百六十一〕　花の盛りは、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやう違はず。

〔百六十二〕　遍照寺の承仕法師、池の鳥を日ごろ飼ひつけて、堂の内まで餌をまきて、戸

○使廳　検非違使廳
○別當　同上の長官
○大衡　九月の異名
○もりちか　傳不詳
○吉平　安倍晴明の子、主計頭陰陽博士
○東の人　東國の人　當時田舍者の代表の如く考へた。
○本寺本山　同じ意　諸末寺の長たる寺。
○顯密　顯教と密教と。顯教は天台華嚴其の他の宗、密教は眞言宗。
○わが俗　自分本來の風俗習慣。

ひとつをあけたれば、數も知らず入りこもりける後、おのれも入りて、立て籠めて捕へつつ殺しけるよそほひ、おどろ〳〵しく聞えけるを、草刈る童聞きて人に告げければ、村の男ども、おこりて入りて見るに、大鴈どもふためきあへる中に、法師まじりて、うち伏せねぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺すところの鳥を頸にかけさせて、禁獄せられけり。基俊大納言別當の時になむ侍りける。

〔百六十三〕　太衡の太の字、點打つ打たずといふこと、陰陽のともがら相論のことありけり。もりちか入道申し侍りしは、「吉平が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衛關白殿にあり。點うちたるを書きたり。」と申しき。

〔百六十四〕　世の人相逢ふ時、しばらくも默止することなし、必ず言葉あり。そのことを聞くに、おほくは無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他のために失多く得少し。これをかたる時、互の心に、無益のことなりといふことを知らず。

〔百六十五〕　東の人の、都の人に交はり、都の人の、東に行きて身をたて、また本寺本山をはなれぬる顯密の僧、すべてわが俗にあらずして、人にまじはれる、見ぐるし。

〔百六十六〕　人間の營みあへる業を見るに、春の日に雪佛を造りて、その爲に金銀珠玉の

○構へ　建設、建立
○いとなみ待つ　計畫して建成を待つ。
○あらぬ道　自分の專門ならぬ道。
○をこ　馬鹿。
○いひけたれ　言ひ消される。けなされる。
○老の方人　老人の味方、老人一般のため氣を吐くもの。
○すたれたる所のなき　一點も缺點のないのは、五分の隙もない緻密綿密されて居るのは。

飾りを營み、堂塔を建てむとするに似たり。その構へを待ちてよく安置してむや。人の命ありと見る程も、下より消ゆる事、雪の如くなるうちに、いとなみ待つこと甚だ多し。

〔百六十七〕　一道に携はる人、あらぬ道の席に臨みて、「あはれ我が道ならましかば、かくよそに見侍らじものを。」といひ、心にも思へる事、常のことなれど、世にわろく覺ゆるなり。知らぬ道の談ましく覺えば、「あな羨まし、などか習はざりけむ。」と言ひてありなむ。我が智を取り出でて人に爭ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙を嚙み出す類なり。人としては善にほこらず、物と爭はざるを德とす。他に勝る事のあるは大きなる失なり。品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ詞に出でてこそいはねども、内心に若干の科あり。謹みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍ひをも招くは、たゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明らかにその非を知るゆゑに、志常に滿たずして、つひに物に誇ることなし。

〔百六十八〕　年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「この人の後には、誰にか問はむ。」などいはるゝは、老の方人にて、生けるも徒らならず。さはあれど、それもすたれた

○建禮門院　高倉帝の中宮。平清盛の女。
○右京大夫　同上に仕へた女官の名、藤原伊行の女。
○世の式も云々　同女房の書いた右京大夫集を引用したのである。
○心づきなき事　氣にくはぬ事、氣乘りのしない事。
○なか〳〵　却つて
○阮籍　晉の竹林七賢の一人。
○青き眼　涼しい眼で親しむ意、青雲に「阮籍字嗣宗、不レ拘二禮教一、謂爲二青白眼一。對レ之、及二稽喜來弔一、籍作二白眼一、喜弟康聞レ之、乃齎レ酒挾レ琴造焉、籍大悅乃見青眼。」

る所のなきは、「一生この事にて暮れにけり。」と拙く見ゆ。「今はわすれにけり。」といひてありなむ。大方は知りたりとも、すゞろにいひ散らすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづから誤りもありぬべし。「さだかにも辨へ知らず。」などいひたるは、なほ實に道のあるじとも覺えぬべし。まして知らぬこと、したり顏に、おとなしくもどきぬべくもあらぬ人のいひ聞かするを、「さもあらず。」と思ひながら聞き居たる、いとわびし。

〔百六十九〕　「何事の式といふ事は、後嵯峨の御代迄はいはざりけるを、近き程よりいふ詞なり。」と、人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、また内裏住したることをいふに、「世の式も變りたる事はなきにも。」と書きたり。

〔百七十〕　さしたる事なくて人の許行くは、よからぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事果てなば疾く歸るべし。久しく居たる、いとむつかし。人と對ひたれば、詞多く、身もくたびれ、心も靜かならず、萬の事さはりて時を移す、互のため益なし。厭はしけにいはむもわろし、心づきなき事あらむをりは、なか〳〵その由をもいひてむ。おなじ心に向はまほしく思はむ人の、つれ〴〵にて、「今しばし、今日は心しづかに。」などいはむは、この限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。その事となきに、人の

○貝をおほふ人　貝合せをする人。
○ひじり目　聖目、菜盤にある九の星。
○清獻公　宋の趙抃
○好事云々　彼の座右銘に「行二好事一、問二前程一」好事は善事。
○禹に當り云々　本草序に出て居る。
○禹　夏の禹王。
○三苗　江淮荆州の蠻國、禹之を征服せしむる事が出來ず國內に歸つて德政を布いたら三苗も自然と歸服した、尙書にある。
○嬉欲　喜怒哀樂愛惡欲の七情、眼耳鼻舌心意の六欲。

來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。また文も、「久しく聞えさせねば。」などばかり言ひおこせたる、いと嬉し。

〔百七十一〕　貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見渡して、人の袖の陰、膝の下まで目をくばる間に、前なるをば人に掩はれぬ。よく掩ふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかり掩ふやうなれど、多く掩ふなり。碁盤のすみに石を立てて彈くに、むかひなる石をまもりて彈くはあたらず。わが手もとをよく見て、こゝなるひじり目をすぐに彈けば、立てたる石必ずあたる。萬のこと外に向きて求むべからず、たゞこゝもとを正しくすべし。清獻公がことばに、「好事を行じて前程を問ふことなかれ。」といへり。世を保たむ道もかくや侍らむ。內を愼まず、輕くほしきまゝにしてみだりなれば、遠國必ずそむく時、始めて謀をもとむ。「風に當り濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚かなる人なり。」と醫書にいへるが如し。目の前なる人の愁へをやめ、惠みを施し、道を正しくせば、その化遠く流れむことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、師をかへして德を布くには如かざりき。

〔百七十二〕　若き時は血氣內にあまり、心物に勤きて、情欲おほし。身をあやぶめて碎け

○苔の袂　僧衣、僧正遍照の歌に「苔人は花の衣になりぬなり苔の袂よ乾きたにせよ」苔の衣とも云ふ。
○玉造　玉造小町壮衰書、小町の晩年を敍した漢文。
○清行　三善清行。
○高野大師　弘法大師、高野山金剛峯寺の開祖、永和三年寂。
○旋り　妙齢時代。
○小鷹　鳴鷹等の小禽を捉る小さな鷹。
○人目をはかり　人目をぬすんで。
○すゞろに　無暗に
○うるはしき人　謹厳な人、端然たる人。

易きこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて資を費し、これを捨てて苦の袂にやつれ、勇める心盛りにして物と爭ひ、心に恥ぢ羨み、好む所日々に定まらず、色に耽り情にめで、行ひを潔くして百年の身を誤り、命を失へるためし願はしくして、身の全く久しからむことをば思はず。すけるかたに心ひきて、ながき世語りともなる。身をあやまつことは、若き時のしわざなり。老いぬる人は精神衰へ、淡くおろそかにして、感じ動くところなし。心おのづから靜かなれば、無益のわざをなさず、身を助けて愁へなく、人の煩ひなからむことを思ふ。老いて智の若き時にまされること、若くして貌の老いたるにまされるが如し。

〔百七十三〕　小野小町がこと、極めてさだかならず。衰へたるさまは、玉造といふ文に見えたり。この文清行が書けりといふ說あれど、高野大師の御作の目錄に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町が盛りなる事、その後のことにや、なほおぼつかなし。

〔百七十四〕　小鷹によき犬、大鷹に使ひぬれば、小鷹に惡くなるといふ。大に就き小を捨つる理まことにしかなり。人事多かる中に、道を樂しむより氣味深きはなし。これ實の大事なり。一たび道を聞きて、これに志さむ人、孰れの業かすたれざらむ、何事をか營

○によび臥し　うめき臥し。
○生を隔てたるやうにして　隔生即忘の歎、前世と全く異にした如く。
○ねたく　恨めしく
○これらになき　我が日本の國にない。
○思ひ入りたるさまに　思慮深ひな樣で
○心にくし　奥ゆかしく。
○思ふ所なく　分別もなく。
○はれらかに　あらはに、むきだしに。
○まばゆからず　恥しい樣もなく。
○よからぬ人　品のない下劣な人。
○口にさしあて　人の口に押しつけ。

まむ。愚かなる人といふとも、賢き犬の心に劣らむや。

〔百七十五〕　世には心得ぬ事の多きなり。ともあるごとにはまづ酒をすゝめ、强ひ飲ませたるを興とする事、いかなる故とも心得ず。飲む人の顏、いと堪へ難けに眉をひそめ、人目をはかりて捨てむとし、遁げむとするを捕へて、引き留めて、すゞろに飲ませつれば、うるはしき人も忽ちに狂人となりてをこがましく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて、前後も知らず倒れふす。祝ふべき日などはあさましかりぬべし。あくる日まであたまいたく、物食はずによび臥し、生を隔てたるやうにして、昨日のこと覺えず、公私の大事を缺きて煩ひとなる。人をしてかゝる目を見すること、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。かく辛き目にあひたらむ人、ねたく口惜しと思はざらむや。他の國にかゝる習ひあなりと、これらになき人事にて傳へ聞きたらむは、あやしく不思議に覺えぬべし。人の上にて見たるだに、心うし。思ひ入りたるさまに心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのゝしり、詞おほく、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかゝげて、用意なきけしき、日頃の人とも覺えず。女は額髮はれらかに搔きやり、まばゆからず、顏うちさゝげてうち笑ひ、杯持てる手に取りつき、よからぬ人は、肴とりて口にさしあて、みづからも食ひたる、さま

○すぢりたる　身をひねらせ踊る意。
○のりあひ　罵り合ひ。
○許さぬ物　手にとつてはならぬと云ふ品物。
○えも云はぬ事　嘔吐放屁などをさす。
○聞えぬ事　わけのわからぬ事、こゝでは明かに男色に關するみだらな事。
○百藥の長　漢書に「夫鹽食骨之將、酒百藥之長。」
○憂へを忘る云々　漢書東方朔傳に「銷憂莫大於酒。」
○酒をとりて云々　梵網經に「自身手過酒器與人飲酒者五百世無手、何況自飲。」

あし。聾の限り出して、おの〳〵謠ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒く穢き身を肩ぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへうとましく憎し。あるはまた我が身いみじき事ども、傍痛くいひ聞かせ、あるは醉ひ泣きし、下ざまの人はのりあひ諍ひて、淺ましく、恐ろしく、はぢがましく、心憂き事のみありて、はては許さぬ物どもおし取りて、緣より落ち、馬車より落ちてあやまちしつ。物にも乘らぬ際は、大路をよろぼひ行きて、築地、門の下などに向きて、えもいはぬ事ども爲ちらし、年老い袈裟かけたる法師の、小童の肩をおさへて、聞えぬ事どもいひつゝよろめきたる、いとかはゆし。かゝる事をしても、この世も後の世も、益あるべき業ならば如何はせむ。この世にては過ち多く、財を失ひ、病をまうく。百藥の長とはいへど、萬の病は酒よりこそ起れ。憂へを忘るといへど、醉ひたる人ぞ、過ぎにし憂さをも思ひ出でて泣くめる。後の世は、人の智惠を失ひ、善根を燒く事火の如くして、惡を增し、萬の戒を破りて、地獄に墮つべし。「酒をとりて人に飲ませたる人、五百生が聞手なき者に生る。」とこそ、佛は說き給ふなれ。かく疎しと思ふものなれど、おのづから捨て難き折もあるべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して、杯いだしたる、萬の興を添ふるわざなり。つれ〴〵なる日、思

○なれ〳〵しからぬあたり　高貴の人。
○いたういたむ人　非常に酒で惱む人、即ち下戸。
○ほれたる顏　ねぼけた顏。
○引きしろひて　ひきずつて。
○黒戸　黒戸御所、清涼殿の北、鑑口の戸の西。
○小松の御門　光孝帝、小松の山陵に葬つたからかく云ふ。
○鎌倉の中書王　一品中務卿宗尊親王、後嵯峨帝の第一皇子中書王は中務卿の唐名、鎌倉幕府に將軍として居られた。
○佐々木隱岐入道　政義、源清の子。

ひの外に友の入り來て、取り行ひたるも心慰む。なれ〳〵しからぬあたりの御簾のうちより、御菓子、御酒など、よきやうなるけはひしてさし出されたる、いとよし。冬せばき所にて、火にて物いりなどして、隔てなきどちさし向ひて多く飲みたる、いとをかし。旅の假屋、野山などにて、「御肴何。」などいひて、芝の上にて飲みたるもをかし。いたういたむ人の、强ひられて少し飲みたるもいとよし。よき人のとりわきて、「今一つ、上すくなし。」などのたまはせたるも嬉し。近づかまほしき人の上戸にて、ひし〳〵と馴れぬる、また嬉し。さはいへど、上戸はをかしく罪許さるゝものなり。醉ひくたびれて朝寢したる所を、主人の引きあけたるに、まどひて、ほれたる顏ながら、細き髻さしいだし、物も著あへず抱きもち、引きしろひて逃ぐるかいどり姿のうしろ手、毛おひたる細脛のほど、をかしくつき〴〵し。

〔百七十六〕　黒戸は、小松の御門位に卽かせ給ひて、昔唯人に坐しし時、まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで常に營ませ給ひける間なり。御薪に煤けたれば黒戸といふとぞ。

〔百七十七〕　鎌倉の中書王にて御鞠ありけるに、雨ふりて後未だ庭の乾かざりければ、いかゞせむと沙汰ありけるに、佐々木隱岐入道、鋸の屑を車に積みておほく奉りたりけれ

○吉田中納言　華原馨房。
○恥しかりき　作者自身も故實を知らなかつた故。
○内侍所　宮中内侍所、鏡を奉安せる所。
○寶劍　三種の神器の一なる天叢雲劍。
○道眼上人　傳不詳。
○宣揚殿經　一名中印度祇園陀大道場經
○江帥　太宰權帥大江匡房。
○西域傳　玄奘が天竺へ行きし紀行文、大唐西域記。
○法顯傳　法顯の天竺へ行きし紀行文。
○さぎちやう　三毬打、正月十五日清涼殿の東庭で青竹を燒く壓魔拂ひの儀式。

ば、一庭に敷かれて、泥土のわづらひ無かりけり。「とりためけむ用意ありがたし。」と人感じあへりけり。この事をある者の語り出でたりしに、吉田中納言の、「乾き砂子の用意やはなかりける。」とのたまひたりしかば、恥しかりき。いみじと思ひける鋸の屑、曉しく異樣のことなり。庭の儀を奉行する人、乾き砂子をまうくるは、故實なりとぞ。

〔百七十八〕　ある所の侍ども、内侍所の御神樂を見て人に語るとて、「寶劍をばその人ぞ持ち給へる。」などいふを聞きて、内裏なる女房の中に、「別殿の行幸には、晝御座の御劍にてこそあれ。」と忍びやかにいひたりし、心憎かりき。その人、ふるき典侍なりけるとかや。

〔百七十九〕　入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、燒野といふ所に安置して、殊に首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。その聖の申されしは、「那蘭陀寺は大門北むきなりと、江帥の說とていひ傳へたれど、西域傳、法顯傳などにも見えず、更に所見なし。江帥はいかなる才覺にてか申されけむ、おぼつかなし。唐土の西明寺は北向き勿論なり。」と申しき。

〔百八十〕　さぎちやうは、正月に打ちたる毬杖を、眞言院より神泉苑へ出して燒きあぐるなり。法成就の池にこそと囃すは、神泉苑の池をいふなり。

○毬杖　毬打、正月毬を打つ兒童の遊戲具、槌に似たもの。
○眞言院　大内裏、八省院の北、修法を行ふ道場。
○神泉苑　二條の大宮なる池ある庭。
○法成就　三毬打の時に唄ふ歌詞。
○清岐典侍が日記　堀河帝の女房の日記
○四條大納言隆親　藤衡の子。
○乾鮭　干鮭

〔百八十一〕　「降れ〳〵粉雪、たんばの粉雪といふ事、米搗き飾ひたるに似たれば粉雪といふ。たまれ粉雪といふべきを、誤りて『たんばの』とは言ふなり。垣や木の股にとうたふべし。」と或ものしり申しき。昔よりいひけることにや。鳥羽院をさなくおはしまして、雪の降るにかく仰せられけるよし、讃岐典侍が日記に書きたり。

〔百八十二〕　四條大納言隆親卿、乾鮭といふものを供御に參らせられたりけるを、「かく怪しきもの參るやうあらじ。」と人の申しけるを聞きて、大納言、「鮭といふ魚まゐらぬことにてあらむにこそあれ。鮭の素干なでふことかあらむ。鮎の素干はまゐらぬかは。」と申されけり。

〔百八十三〕　人突く牛をば角を切り、人くふ馬をば耳を切りてそのしるしとす。しるしをつけずして人をやぶらせぬるは、主の科なり。人くふ犬をば養ひ飼ふべからず。これみな科あり、律の禁なり。

〔百八十四〕　相模守時賴の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝことありける に、煤けたるあかり障子の破ればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ張られけ

○經營　けいめい。世話役。

○城陸奥守泰盛　城は出羽秋田城、城介で陸奥守を兼ねた、義景の子、北條時宗の聟。

○鞍を置きかへ　他の馬へ鞍きかへる。

れば、兄の城介義景、その日の經營して候ひけるが、「たまはりて、なにがし男に張らせ候はむ。さやうの事に心得たるものに候。」と申されければ、「その男、尼が細工によも勝り侍らじ。」とてなほ一間づゝ張られけるを、義景、「皆を張りかへ候はむは、遙かにたやすく候べし。斑に候も見苦しくや。」と、重ねて申されければ、「尼も後はさわ〳〵と張りかへむと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐることぞと、若き人に見ならはせて、心づけむ爲なり。」と申されける、いと有り難かりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心に通へり。天下をたもつほどの人を子にて持たれける、誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。

〔百八十五〕　城陸奥守泰盛は雙なき馬乘なりけり。馬を引き出でさせけるに、足をそろへて閾をゆらりと超ゆるを見ては、「これは勇める馬なり。」とて鞍を置きかへさせけり。また足を伸べて閾に蹴あてぬれば、「これは鈍くして過ちあるべし。」とて乘らざりけり。道を知らざらむ人、かばかり恐れなむや。

〔百八十六〕　吉田と申す馬乘の申し侍りしは、「馬毎にこはきものなり。人の力爭ふべからずと知るべし。乘るべき馬をばまづよく見て、強き所弱き所を知るべし。次に轡鞍の具に

○諦藏　諦傳、諦談。

○不堪　堪能ならぬこと、下手。

○堪能　上手。

○非家　その道の專門外の人。

○ならぶ時　立ちならびて競技なぞする時。

○自由なると　專門外の人の勝手がましいのと。

○因果の理　佛教の一教義、善因に善果、惡因に惡果ある理。

○たづき　方法手段

○聽聞　佛事の時主裁する人、說經師もその一。

○檀那　梵語ダンナパテの異轉、施主、寺の保護者。

○早歌　當時流行した小唄の類であらう

危きことやあると見て、心にかゝる事あらば、その馬を馳すべからず。この用意を忘れざるを馬乘とは申すなり、これ祕藏のことなり。」と申しき。

〔百八十七〕　萬の道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさることは、たゆみなく愼みて輕々しくせぬと、偏に自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方の振舞、心づかひも、愚かにして謹めるは得の本なり、巧みにしてほしきまゝなるは失の本なり。

〔百八十八〕　ある者、子を法師になして、「學問して因果の理をも知り、說經などして世渡るたづきともせよ。」といひければ、敎のまゝに說經師にならむ爲に、まづ馬に乘りならひけり。興、車もたぬ身の、導師に請ぜられむ時、馬など迎へにおこせたらむに、桃尻にて落ちなむは心憂かるべし。」と思ひけり。次に、「佛事の後、酒など勸むることあらむに、法師のむけに能なきは、檀那すさまじく思ふべし。」とて、早歌といふ事をならひけり。二つのわざやうゝ境に入りければ、愈よくしたく覺えて嗜みける程に、說經習ふべき暇なくて年よりにけり。この法師のみにもあらず、世間の人なべてこの事あり。若きほどは諸事につけて、身をたて、大きなる道をも成し、能をもつき、學問をもせむと、行末久し

○あらます事　豫期する事。

○むねとあらまほしからむこと　主として最も希望する事。

○心にとりもちては　絶えず心に思つては、執著しては。

○東山　京都の東方に連る諸山の總稱。

○西山　京都の西なる諸山の總稱。

○日をささぬ　日を指定せぬ、いつと日限をきめぬ。

くあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひてうち怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみまぎれて月日をおくれば、事毎になすことなくして身は老いぬ。つひにものの上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれどもとり返さるゝ齢ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へゆく。されば一生のうち、むねとあらまほしからむことの中に、いづれか勝ると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてて、一事を勵むべし。一日の中一時のうちにも、數多のことの來らむ中に、すこしも益のまさらむことを營みて、その外をばうち捨てて、大事をいそぐべきなり。いづかたをも捨てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。たとへば棊をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすて大につくが如し。それにとりて、三つの石をすてて、十の石につくことは易し。十をすてて十一につくことは、かたし。一つなりとも勝らむかたへこそつくべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へにくし。これをも捨てず、かれをも取らむと思ふこゝろに、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。京に住む人、急ぎて東山に用ありて既に行きつきたりとも、西山に行きてその益まさるべきを思ひえたらば、門よりかへりて西山へゆくべきなり。「こゝまで來著きぬれ

○ますほの薄云々　ますは接頭語、そほは赭色、色の赤い穂のすゝき、ますほはまそほの轉訛で意味は同じだが、當時之を區別したのである。

○渡邊のひじり　摂津渡邊に住んだ聖僧傳不詳。

○登蓮法師　傳不詳作歌許りは詞花集以下の勅撰集にある、此の話は鴨長明の無明抄に出た。

○敏きときは　論語に「敏則有功。」

○一大事の因緣　佛法の後世往生の因緣

○頼めぬ　頼みに思はなかつた。

ば、この事をばまづいひてむ、日をささぬことなれば、西山の事はかへりてまたこそ思ひたためと思ふ故に、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。これをおそるべし。一事を必ず成さむと思はば、他の事の破るゝをも痛むべからず。人のあざけりをも恥づべからず。萬事にかへずしては一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、あるもの、「ますほの薄まそほの薄などいふことあり。渡邊のひじり、この事を傳へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠やある、貸したまへ。かの薄のことならひに、渡邊の聖のがり尋ねまからむ。」といひけるを、「あまりに物さわがし。雨やみてこそ。」と人のいひければ、「無下の事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨の晴間を待つものかは、我も死に、聖もうせなば、尋ね聞きてむや。」とて、はしり出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと申し傳へたるこそ、ゆゝしくありがたう覺ゆれ。「敏きときは則ち功あり。」とぞ、論語といふ文にも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因緣をぞ思ふべかりける。

〔百八十九〕　今日はその事をなさむと思へど、あらぬ急ぎまづ出で來て紛れ暮し、待つ人は障りありて、頼めぬ人はきたり、頼みたる方のことはたがひて、思ひよらぬ道ばかりは

○とりすゑて　娶つて家に置いて。
○異なる事なき　特長もない、平凡な。
○らうたくして　可愛がつて。
○あが佛　自分の本尊。
○かしづき　大事にし。
○半空　中途半端、かつちつかず。
○はえ　物の光彩。
○色ふし　色あひ。
○ことそぎ　省異する。

かなひぬ。煩はしかりつる事はことなくて、安かるべき事はいと心苦し。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年のこともかくの如し。一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし、皆違ひゆくかと思ふに、おのづから違はぬ事もあれば、いよ〳〵ものは定めがたし。不定と心得ぬるのみ、誠にて違はず。

〔百九十〕　妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。「いつも獨り住みにて。」など聞くこそ心憎けれ。「たれがしが壻になりぬ。」とも、又、「いかなる女をとりすゑて相住む。」など聞きつれば、無下に心劣りせらるゝわざなり。「異なることなき女を、よしと思ひ定めてこそ、添ひ居たらめ。」と、賤しくもおし測られ、よき女ならば、「この男こそらうたくして、あが佛と守りゐたらめ。たとへば、さばかりにこそ。」と覺えぬべし。まして家の内を行ひをさめたる女、いと口惜し。子など出できて、かしづき愛したる、心憂し。男なくなりて後、尼になりて年よりたる有樣、亡きあとまで淺ましい。いかなる女なりとも、明暮そひ見むには、いと心づきなく憎かりなむ。女のためも、半空にこそならめ。よそながら時々通ひ住まむこそ、年月へても絶えぬなからひともならめ。あからさまに來て、泊り居などせむは、めづらしかりぬべし。

○およすけたる　ませた、じみな人目につかぬ。
○よきはよく　よきものはいよ〳〵よく
○髪晴れなく　髪と晴となく、ふたん著と晴著との區別なく
○ゆする　泔し、米汁にて髪を洗ふ事こゝでは髪を洗ひ櫛り。
○すべり　退出し。
○くらき人　闇愚者
○はかりて　忖度して、推量して。
○文字の法師、暗證の禪師　學問を主とする法師、卽ち教相を習うて實際的の坐禪を知らぬ僧と、坐禪工夫を主として、教理の研究の足らぬ僧と。

〔百九十一〕　夜に入りて物のはえ無しといふ人、いと口惜し。萬の物のきら、飾り、色ふしも、夜のみこそめでたけれ。晝は事そぎ、およすけたる姿にてもありなむ。夜はきらゝかに花やかなる裝束いとよし。人のけしきも、夜の火影ぞよきはよく、物いひたる聲も、暗くて聞きたる、用意ある、心憎し。匂ひも物の音も、たゞ夜ぞひときはめでたき。さして異なる事なき夜、うち更けて參れる人の、清げなる樣したる、いとよし。若きどち心とどめて見る人は、時をも分かぬものなれば、殊にうちとけぬべき折節ぞ、褻晴れなく引きつくろはまほしき。よき男の、日くれてゆするし、女も夜更くる程に、すべりつゝ、鏡とりて顏などつくろひ出づるこそをかしけれ。

〔百九十二〕　神佛にも、人の詣でぬ日、夜まゐりたる、よし。

〔百九十三〕　くらき人の、人をはかりて、その智を知れりと思はむ、更に當るべからず。拙き人の、栞うつことばかりに敏くたくみなるは、賢き人のこの藝におろかなるを見て、おのれが智に及ばずと定めて、萬の道のたくみ、わが道を人の知らざるを見て、おのれ勝れたりと思はむこと、大きなるあやまりなるべし。文字の法師、暗證の禪師、互にはかりて、おのれに如かずと思へる、共にあたらず。己が境界にあらざるものをば、爭ふべから

○達人　道理に通達する人、賢達の人。
○得たる所　特質。
○久我畷　京都の南鳥羽の西、桂川の西岸から山崎へ至る眞直ぐな道。
○小袖　下著。
○大口　大口袴、束帶の時表袴の下に著る裾の口の大きくあいてる袴。
○久我内大臣　通基　通忠の子。
○尋常におはしましける時　平常あたりまへの時は。卽ち今精神に異作的異常のある事をほのめかしてある。
○東大寺の神輿　奈良東大寺の鎭守である手向山八幡宮の神輿。

ず、是非すべからず。

〔百九十四〕　達人の人を見る眼は、少しも誤る處あるべからず。たとへば、ある人の、世に虛言を構へ出して、人をはかることあらむに、素直に眞と思ひて、いふ儘にはからるゝ人あり。あまりに深く信をおこして、なほ煩はしく虛言を心得添ふる人あり。また何としも思はで、心をつけぬ人あり。又いさゝかおほつかなく覺えて、たのむにもあらずたのまずもあらで、案じ居たる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふことなれば、さもあらむとて止みぬる人もあり。又さまざまに推し心得たるよししして、かしこけに打ちうなづき、ほゝゑみて居たれど、つやつや知らぬ人あり。また推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほ誤りもこそあれと怪しむ人あり。又異なるやうも無かりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。また心得たれども、知れりともいはず、おほつかなからぬは、とかくの事なく、知らぬ人と同じ樣にて過ぐる人あり。またこの虛言の本意を、初めより心得て、すこしも欺かず、構へいだしたる人とおなじ心になりて、力をあはする人あり。愚者の中のたはぶれだに、知りたる人の前にては、このさまざまの得たる所、詞にても顏にても、かくれなく知られぬべし。ましてあきらかならむ人の、惑へるわれらを見むこと、掌の

○東寺の若宮　東寺の鎭守たる男山八幡宮に本宮と若宮とがある、若宮は仁德帝をまつる。
○歸座　男山から手向山へ歸る事。
○この殿　前出の久我通基。
○土御門相國　定實
○警蹕　先を追ふ事
○北山抄　藤原公任の著書、一條帝以後の典禮を書いてある。
○西宮　源高明著の西宮記。
○定額の女孺　一定の人數の下級の女官
○延喜式　延喜年間に出來し卽中行事典禮の書、藤原時平、忠平の編纂。

上のものを見むがごとし。たゞしかやうのおしはかりにて、佛法までをなずらへ言ふべきにはあらず。

〔百九十五〕　ある人、久我畷を通りけるに、小袖に大口きたる人、木造の地藏を田の中の水におしひたして、ねんごろに洗ひけり。心得がたく見るほどに、狩衣の男二人三人出で來て、「こゝにおはしましけり。」とて、この人を具して往にけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。尋常におはしましける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。

〔百九十六〕　東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座のとき、源氏の公卿參られけるに、この殿大將にて、先を追はれけるを、土御門相國、「社頭にて警蹕いかゞはべるべからむ。」と申されければ、「隨身のふるまひは、兵仗の家が知る事に候。」とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、「この相國、北山抄を見て、西宮の說をこそ知られざりけれ。眷屬の惡鬼惡神を恐るゝゆゑに、神社にて殊に先を追ふべき理あり。」とぞ仰せられける。

〔百九十七〕　諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふこと、延喜式に見えたり。すべて數さだまりたる公人の通號にこそ。

〔百九十八〕　揚名介に限らず、揚名目といふものあり。政事要畧にあり。

○掃名の介　名目ありて職掌伴給なき介
○日　國司中第四級目の殺。
○政事要略　古來の法制を編纂したる書一條帝の時惟宗允亮編。
○横川　叡山横川谷
○仁壽殿　清涼殿東。
○退凡下乗　凡人の出入を禁じ、貴人も車馬から下る、標札の代りに三つの卒塔婆。
○かみなづき　雷無月とか神嘗月とか諸說がある。
○靫　矢を入れる器
○五條の天神　京都五條南、西洞院の西、少將名神。
○看督長　檢非違使廳附屬の官。

〔百九十九〕　横川の行宣法印が申しはべりしは、「唐土は呂の國なり、律の音なし。和國は單律の國にて呂の音なし。」と申しき。

〔二百〕　呉竹は葉ほそく、河竹は葉ひろし。御溝にちかきは河竹、仁壽殿の方に寄りて植ゑられたるは呉竹なり。

〔二百一〕　退凡下乗の卒都婆、外なるは下乗、内なるは退凡なり。

〔二百二〕　十月をかみなづきといひて、神事に憚るべき由は、記したるものなし。本文も見えず。たゞし、當月諸社の祭なきゆゑに、この名あるか。この月萬の神たち、太神宮へ集り給ふなどいふ說あれども、その本說なし。さる事ならば、伊勢には殊に祭月とすべきに、その例もなし。十月、諸社の行幸、その例も多し。但し多くは不吉の例なり。

〔二百三〕　敕勘の所に靫かくる作法、今は絶えて知れる人なし。主上の御惱、大かた世の中のさわがしき時は、五條の天神に靫をかけらる。鞍馬に靫の明神といふも、靫かけられたりける神なり。看督長の負ひたる靫を、その家にかけられぬれば、人出で入らず。この事絶えて後、今の世には、封をつくることになりにけり。

〔二百四〕　犯人を笞にて打つ時は、拷器によせて結ひつくるなり。拷器のやうも、よする作法も今はわきまへ知れる人なしとぞ。

○大師勸請云々　慈恵大師の書かれた神棚の盛を迎へ請じての誓文。
○慈恵　良源、近江淺井の人、後天台座主となる。
○德大寺右大臣　公孝、後太政大臣。
○大理　同檢非違使別當の唐名。
○濱床　三尺四方、高さ一尺の臺四つを合し上に疊を敷き帳を垂れし貴人廂。
○にれ　獸の反芻。
○怪しみを見て　千金方に「見怪不怪、其怪自壞」。
○龜山殿　嵯峨龜山の仙洞御所。

〔二百五〕　比叡山に、大師勸請の起請文といふ事は、慈恵僧正書きはじめ給ひけるなり。起請文といふ事、法曹にはその沙汰なし。古の聖代、すべて起請文につきて行はるゝ政はなきを、近代このこと流布したるなり。また法令には、水火に穢れをたてず、入物にはけがれあるべし。

〔二百六〕　德大寺右大臣殿檢非違使の別當のとき、中門にて使廳の評定行はれけるほどに、官人章兼が牛はなれて、廳のうちへ入りて、大理の座の濱床の上にのぼりて、にれうち嚙みて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへ遣すべきよし、おの〳〵申しけるを、父の相國聞きたまひて、「牛に分別なし、足あらばいづくへかのぼらざらむ。冠弱の官人、たま〳〵出仕の徵牛をとらるべきやうなし。」とて、牛をば主にかへして、臥したりける疊をばかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなむ。怪しみを見て怪しまざる時は、怪しみかへりてやぶるといへり。

〔二百七〕　龜山殿建てられむとて、地を引かれけるに、大きなる蛇數もしらず凝り集りたる塚ありけり。この所の神なりといひて、事の由申しければ、「いかゞあるべき。」と敕問

○經文などの紐　巻物の經文で紐がある
○襷にちがへて　襷のやうに交叉し、
○わな　紐の曲つた先を云ふ。
○華厳院の弘舜僧正　傳不詳。
○この頃やう　近代風、當世風。
○うるはしくは　完全なのは。

ありけるに、「ふるくよりこの地を占めたるものならば、さうなく掘り捨てられがたし。」とみな人申されけるに、この大臣一人、「王土に居らむ蟲、皇居を建てられむに、何の祟をかなすべき。鬼神は邪なし。咎むべからず。唯皆掘りすつべし。」と申されたりければ、塚をくづして、蛇をば大井川に流してけり。更にたゝりなかりけり。

〔二百八〕　經文などの紐を結ふに、上下より襷にちがへて、二すぢの中より、わなの頭を横ざまにひき出すことは、常のことなり。さやうにしたるをば、華厳院の弘舜僧正解き直させけり。「これはこの頃やうのことなり。いと見にくし。うるはしくは、たゞくるくると捲きて上より下へ、わなの先を挿むべし。」と申されけり。ふるき人にて、かやうのこと知れる人になむ侍りける。

〔二百九〕　人の田を論ずるもの、訟へにまけて嫉さに、その田を刈りて取れとて、人をつかはしけるに、まづ道すがらの田をさへ刈りもて行くを、「これは論じ給ふ所にあらず。いかにかくは。」といひければ、刈るものども、「その所とても刈るべき理なけれども、僻事せむとてまかるものなれば、いづくをか刈らざらむ。」とぞいひける。ことわりいとをかしかりけり。

○喚子鳥　古今三鳥の一としてやかましく云ふ鳥、郭公鳥であらうと云ふ。
○招魂の法　死者の魂を呼び招く祭法。
○鵲　鳥の類。
○萬葉集云々　同巻一「ぬえこどりうらなけ居れば」云々。
○孔子も云々　史記に「孔子于七十餘君、莫所遇。」
○顔回云々　論語に「有顔回者、不幸短命死。」
○ひしひくだく　壓し碎く。

〔二百十〕　喚子鳥は春のものなりと許りいひて、いかなる鳥ともさだかに記せる物なし。ある眞言書の中に、喚子鳥なくとき招魂の法をば行ふ次第あり。これは鵲なり。萬葉集の長歌に、「霞たつ永き春日の。」など續けたり。鵲鳥も喚子鳥の事樣に通ひて聞ゆ。

〔二百十一〕　萬の事は頼むべからず。愚かなる人は、深くものを頼むゆゑに、うらみ怒ることあり。勢ひありとて頼むべからず、こはき者まづ滅ぶ。財多しとて頼むべからず、時の間に失ひやすし。才ありとて頼むべからず、孔子も時に遇はず。德ありとてたのむべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず、誅をうくる事速かなり。奴したがへりとて頼むべからず、そむき走ることあり。人の志をも頼むべからず、かならず變ず。約をも頼むべからず、信あることすくなし。身をも人をも頼まざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず、左右廣ければさはらず、前後遠ければふさがらず、せばき時はひしけくだく。心を用ゐること少しきにしてきびしき時は、物に逆ひ爭ひてやぶる。寛くして柔かなるときは、一毛も損ぜず。人は天地の靈なり。天地はかぎるところなし、人の性何ぞ異ならむ。寛大にして窮らざるときは、喜怒これにさはらずして、物のためにわづらはず。

○火爐　火鉢。
○八幡の御幸　男山八幡宮に上皇のゆかれる事。
○相失樋　白氏文集には相失鞘とある、相府蓮といふ説もある、本文に出て居る。
○蓮府　大臣の邸。
○廻忽　樂の名。
○廻鶻國　廻乾とも云ふ、外蒙古の一種族。
○平宣時　大佛陸奥守宣時、朝直の子。
○やがて　すぐ。
○異樣　粗末のもの
○なえたる　布の糊がぬけて萎えたる。
○うち〳〵のまゝ　平常のまゝで。
○たうべむ　たべん。

〔二百十二〕　秋の月は限りなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひ分かざらむ人は、無下に心うかるべきことなり。

〔二百十三〕　御前の火爐に火をおくときは、火箸して挾む事なし。土器より直ちにうつすべし。されば轉び落ちぬやうに心得て、炭を積むべきなり。八幡の御幸に、供奉の人淨衣を著て、手にて炭をさされければ、ある有職の人、「白き物を著たる日は、火箸を用ゐる、苦しからず。」と申されけり。

〔二百十四〕　想夫戀といふ樂は、女、男を戀ふる故の名にはあらず。もとは相府蓮、文字のかよへるなり。晉の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せしときの樂なり。これより大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とて夷の強き國あり、その夷、漢に伏して後にきたりて、おのれが國の樂を奏せしなり。

〔二百十五〕　平宣時朝臣、老いの後昔語に、「最明寺入道、ある宵の間によばるゝ事ありしに、『やがて。』と申しながら、直垂のなくて、とかくせし程に、また使きたりて、『直垂などのさふらはぬにや。夜なれば異樣なりとも疾く。』とありしかば、なえたる直垂、うち〳〵の儘にて罷りたりしに、銚子にかはらけ取りそへてもて出でて、『この酒をひとりたうべむがさうゞしければ申しつるなり。肴こそなけれ、人はしづまりぬらむ。さりぬべき物やあると、いづくまでも求め給へ。』とありしかば、紙燭さしてくまゝを求めしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、『これぞ求め得て候。』と申ししかば、『事足りなむ。』とて、心よく數獻に及びて興に入られはべりき。その世にはかくこそ侍りしか。」と申されき。

○祇園　脂燭とも雲く、紙に脂油をぬりしもの。
○くまゝ〳〵　すみずみ。
○足利左馬入道　足利義氏、義兼の子。
○あるじさうけ云々　饗應設備の樣。
○打鮑　鮑肉を打ちのべたもの。
○かい餅　今の萩の餅。
○隆辨　鶴ケ岡八幡の別當。
○あるじ方　主人側
○心もとなく　不安心、貫へるが心配。
○調ぜさせ　仕立てさせ。
○德をつく　富を身につける。

〔二百十六〕　最明寺入道、鶴岡の社參の序に、足利左馬入道の許へ、まづ使を遣して、立ちいられたりけるに、あるじまうけられたりけるやう、一獻に打鮑、二獻にえび、三獻にかい餅にて止みぬ。その座には、亭主夫婦、隆辨僧正、あるじ方の人にて坐せられけり。さて、「年ごとに賜はる足利の染物心もとなく候。」と申されければ、「用意し候。」とて、いろいろの染物三十、前にて、女房どもに小袖に調ぜさせて、後につかはされけり。その時見たる人のちかくまで侍りしが、かたり侍りしなり。

〔二百十七〕　ある大福長者の曰く、「人は萬をさしおきて、一向に德をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。德をつかむとおもはば、すべからくまづその心づかひを修行すべし。その心といふは他の事にあらず。人間常住の思ひに住して、假

○小用　一寸した用。
○奴　下僕。
○火の乾けるに云々　非常に容易に出來る比喩、易に「水流ル濕、火就ル燥。」
○宴飲聲色　酒宴と管樂と性欲。
○雜魚　共に雜物の名稱、發熱激しく危險な雜物。
○究竟　天台に六階級あつて凡夫が成佛するまでを分つてある、究竟はその最高。
○理卽　同上の最低階級、單に佛性のみ具備して開發されないもの。
○堀河殿　太政大臣久我基具の邸。
○舍人　御厩の牛飼
○下法師　身分の低い法師。

にも無常を觀ずる事なかれ。これ第一の用心なり。次に萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に從ひて志を遂けむと思はば、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願は止むときなし。財は盡くる期あり。かぎりある財をもちてかぎりなき願ひに從ふこと、得べからず。所願心に兆すことあらば、われを亡すべき惡念きたれりと、かたく愼みおそれて、小用をもなすべからず。次に、錢を奴の如くしてつかひ用ゐるものと知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く神のごとくおそれ尊みて、從へ用ゐることなかれ。次に恥にのぞむといふとも、怒り怨むる事なかれ。次に正直にして、約をかたくすべし。この義を守りて利をもとめむ人は、富の來ること、火の乾けるに就き、水の下れるに從ふが如くなるべし。錢つもりて盡きざるときは、宴飲聲色を事とせず、居所をかざらず、所願を成ぜざれども、心とこしなへに安く樂し。」と申しき。そも〳〵人は所願を成ぜむがために財をもとむ。錢を財とする事は、願ひをかなふるが故なり。所願あれども叶へず、錢あれども用ゐざらむは、全く貧者とおなじ。何をか樂しびとせむ。このおきてはたゞ人間の望みを絶ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲をなして樂しびとせむよりは、しかじ財なからむには。癰疽を病む者、水に洗ひて樂し

○四條黃門　中納言四條隆資、黃門は中納言の唐名。
○命ぜられて　仰せられて。
○龍秋　樂人豐原龍秋、笙の名手。
○短慮の至り　淺はかな考への至り、謬誤した語。
○荒涼　すさまじい無作法。
○五の穴　橫笛には吹口の外七つ穴がある、その笛の端から三つ目の穴、下無調。○千の穴は同じく二つ目の穴、平調。
○上の穴　雙調とも云ふ。
○鳳凰、鳥鐘、龜鐘　神仙　皆七つの笛穴より出づ管律の中間の音である。

びとせむよりは、病まざらむには如かじ。こゝに至りては、貧富分くところなし。究竟は理卽にひとし。大欲は無欲に似たり。

〔二百十八〕　狐は人に食ひつく者なり。堀河殿にて、舍人が寢たる足を、狐にくはる。仁和寺にて、夜、本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛びかゝりて食ひつきければ、刀を拔きてこれを拒ぐ間、狐二疋を突く。一つはつき殺しぬ。二は遁げぬ。法師はあまた所くはれながら、ことゆゑなかりけり。

〔二百十九〕　四條黃門命ぜられて曰く、「龍秋は道にとりてはやんごとなき者なり。先日來りて曰く、『短慮の至り、極めて荒涼の事なれども、橫笛の五の穴は、聊か訝かしき所の侍るかと、ひそかにこれを存ず。そのゆゑは、干の穴は平調、五の穴は下無調なり。その間に勝絶調をへだてたり。上の穴雙調、次に鳳鐘調をおきて、夕の穴黃鐘調なり。その次に鸞鏡調をおきて、中の穴盤涉調、中と六との間に神仙調あり。かやうに間々にみな一律をぬすめるに、五の穴のみ上の間に調子をもたずして、しかも間をくばる事ひとしきゆゑに、その聲不快なり。さればこの穴を吹くときは、かならずのく。のけあへぬときは物にあはず。吹き得る人難し。』と申しき。料簡のいたり、まことに興あり。先達後生を恐ると

○景茂　大神景茂。
○性骨　天性得た骨
○呂律　調子。
○天王寺　大阪に存する四天王寺。
○伶人　樂人。
○太子　聖徳太子、卽ち四天王寺の創建者。
○博士　笛博士、音譜を云ふ。
○六時堂　晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の六時に勤をする堂。
○黃鐘調の最中　黃鐘調は音調の名、そのまんなか。
○聖霊會　二月二十二日聖徳太子の忌日
○祇園精舍の無常院　印度舍衛國の寺院その西北隅にある無常院と云ふ寺。

いふ事、この事なり。」と侍りき。他日に景茂が申し侍りしは、「笙は調べおほせてもちたれば、たゞ吹くばかりなり。笛はふきながら、息のうちにて、かつ調べもてゆく物なれば、穴ごとに口傳の上に、性骨を加へて心を入るゝ事、五の穴のみにかぎらず。偏にのくとばかりも定むべからず。あしく吹けば、いづれの穴も快からず。上手はいづれをも吹きあはす。呂律のものにかなはざるは、人の咎なり、器の失にあらず。」と申しき。

〔二百二十〕　「何事も、邊土は卑しく頑なれども、天王寺の舞樂のみ、都に恥ぢず。」といへば、天王寺の伶人の申し侍りしは、「當寺の樂は、よく圖をしらべ合せて、物の音のめでたく整ほり侍ること、外よりも勝れたり。ゆゑは太子の御時の圖、今にはべるを博士とす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。そのころ黃鐘調の最中なり。寒暑に從ひて上り下りあるべきゆゑに、二月涅槃會より聖霊會までの中間を指南とす。祕藏のことなり。この一調子をもちて、いづれの聲をもとゝのへ侍るなり。」と申しき。およそ鐘のころは黃鐘調なるべし。これ無常の調子、祇園精舍の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黃鐘調に鑄らるべしとて、あまたたび鑄替へられけれども、かなはざりけるを、遠國よりたづね出されけり。法金剛院の鐘の聲、また黃鐘調なり。

○西園寺　山城衣笠岡の西北、西園寺公經の建立した寺。
○法金剛院　山城葛野郡太秦にある寺。
○放免　檢非違使廳の下部の名稱。
○水干　水はりせし絹の狩衣。
○遁志　明法道の者檢非違使廳四番目の殺になつた名稱。
○竹谷　山城醍醐の地名。
○乘願房　そこに居りし淨土宗の法師。
○東二條院　後深草帝の皇后公子。
○光明眞言云々　共に眞言宗の呪詛。
○田鶴の大殿　九條基家、良經の子。

〔二百二十一〕　建治弘安のころは、祭の日の放免のつけものに、異樣なる紺の布四五端にて、馬をつくりて、尾髮には燈心をして、蜘蛛の網かきたる水干に附けて、歌の心などいひて渡りしこと、常に見及び侍りしなども、興ありてしたる心地にてこそ侍りしか。」と、老いたる道志どもの、今日もかたりはべるなり。この頃は、つけもの年をおくりて、過差ことの外になりて、萬の重きものを多くつけて、左右の袖を人にもたせて、みづからは鉢をだに持たず、息づき苦しむ有樣いと見ぐるし。

〔二百二十二〕　竹谷の乘願房、東二條院へ參られたりけるに、「亡者の追善には何事か勝利多き。」と尋ねさせ給ひければ、「光明眞言、寶篋印陀羅尼。」と申されたりけるを、弟子ども、「いかにかくは申し給ひけるぞ。念佛に勝ること候まじとは、など申し給はぬぞ。」と申しければ、「わが宗なれば、さこそ申さまほしかりつれども、まさしく稱名を追福に修して巨益あるべしと說ける經文を見及ばねば、何に見えたるぞと、重ねて問はせ給はば、いかゞ申さむとおもひて、本經のたしかなるにつきて、この眞言、陀羅尼をば申しつるなり。」とぞ申されける。

〔二百二十三〕　田鶴の大殿は、童名たづ君なり。「鶴を飼ひ給ひける故に。」と申すは僻事な

○陰陽師有宗　陰陽頭安位、有宗、有家の子。
○多久資　多氏、醫樂家の家。
○通憲　藤原信西、平治亂に殺された。
○磯の禪師　舞姫讃岐國小磯から出た。
○鞘卷　鍔なき短刀の一種。
○ひき入れ　かぶる
○本緣　由來。
○源光行　歌人、光末の子。
○龜菊　京都白拍子
○前司　以前の國司
○行長　傳不詳。
○樂府　漢詩の一詩形。
○七德の舞　秦王破陣樂の一名、武德の頌語七つある、之を七德と稱する。

り。

〔二百二十四〕　陰陽師有宗入道、鎌倉より上りて、尋ねまうできたりしが、まづさし入りて、「この庭の徒らに廣き事、淺ましく、あるべからぬことなり。道を知るものは、植うる事をつとむ。細道ひとつ殘して、みな畠に作りたまへ。」と諫め侍りき。誠にすこしの地をも徒らに置かむことは益なきことなり。食ふ物、藥種などうゑおくべし。

〔二百二十五〕　多久資が申しけるは、通憲入道、舞の手のうちに興ある事どもを選びて、磯の禪師といひける女に教へて、舞はせけり。白き水干に鞘卷をさゝせ、烏帽子をひき入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師がむすめ靜といひける、この藝をつけり。これ白拍子の根源なり。佛神の本緣をうたふ。その後源光行、おほくの事をつくれり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊に教へさせ給ひけるとぞ。

〔二百二十六〕　後鳥羽院の御時、信濃前司行長稽古の譽ありけるが、樂府の御論義の番に召されて、七德の舞を二つ忘れたりければ、五德の冠者と異名をつきにけるを、心憂き事にして、學問をすてて遁世したりけるを、慈鎭和尙、一藝ある者をば、下部までも召しおきて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へて語らせけり。さて山門のことを殊にゆゝしく書けり。九郎判官の事は委しく知りて書き載せたり。蒲冠者の事は能く知らざりけるにや、多くの事どもを記しもらせり。武士の事弓馬のわざは、生佛東國のものにて、武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生佛がうまれつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

○生佛　琵琶の名手
○六時禮讃　淨土宗で、晝夜六時に禮拜讃美する歌。
○善觀坊　傳不詳。
○醍醐　印度尊樂の一、經文を美音で朗讀する事、一名梵唄。
○一念の念佛　稱名念佛、一聲口の念佛。
○法事讃　唱文の名
○千本　京都北野神社の東北にある大報恩寺。
○釋迦念佛　同寺で三月九日から十五日までである法會。
○如輪上人　法然上人の門弟、澄空。
○妙觀　摂津勝尾寺の僧、同寺の觀音を刺む。
○藤大納言　藤原爲世の事であらう。

〔二百二十七〕　六時禮讃は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて作りて勤めにしけり。その後太秦の善觀房といふ僧、ふしはかせを定めて聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代より始まれり。法事讃も同じく善觀房はじめたるなり。

〔二百二十八〕　千本の釋迦念佛は、文永のころ、如輪上人これを始められけり。

〔二百二十九〕　よき細工は、少し鈍き刀をつかふといふ。妙觀が刀はいたく立たず。

〔二百三十〕　五條の内裏には妖物ありけり。藤大納言殿語られ侍りしは、殿上人ども、黑戸にて棊をうちけるに、御簾をかゝげて見る者あり。「誰そ。」と見向きたれば、狐、人のやうについゐてさしのぞきたるを、「あれ狐よ。」ととよまれて、まどひ逃げにけり。未練の狐化け損じけるにこそ。

〔二百三十一〕　『園』別當入道は、雙なき庖丁者なり。ある人の許にて、いみじき鯉を出

したりければ、みな人、別當入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でむも如何とためらひけるを、別當入道さる人にて、『この程百日の鯉を切り侍るを、今日缺き侍るべきにあらず、まけて申しうけむ。』とて切られける、いみじくつきづきしく興ありて、人ども思へりける。」と、ある人北山太政入道殿に語り申されたりければ、「かやうの事、おのれは世にうるさく覺ゆるなり。切りぬべき人なくば、たべ、切らむといひたらむは、猶よかりなむ。なんでふ百日の鯉を切らむぞ。」と宣ひたりし、をかしくおぼえし。』と人のかたり給ひける、いとをかし。大かたふるまひて興あるよりも、興なくて安らかなるがまさりたることなり。賓客の饗應なども、ついでをかしき樣にとりなしたるも、誠によけれども、唯その事となくてとり出でたる、いとよし。人に物を取らせたるも、ついでなくて、「これを奉らむ。」といひたる、まことの志なり。惜しむよししてゞはれむと思ひ、勝負の負けわざにことつけなどしたる、むつかし。

〔二百三十二〕　すべて人は無智無能なるべきものなり。ある人の子の、見ざまなど惡しからぬが、父の前にて人と物いふとて、史書の文をひきたりし、賢しくは聞えしかども、尊者の前にては、然らずともと覺えしなり。

○黑戸　淸涼殿の北、瀧口の戸の西。
○別當入道　藤原基氏、基家の子。
○庖丁者　料理人。
○百日の鯉　蔵職により百日間、毎日鯉を切る事。
○北山太政入道　西園寺公經。
○たゞ　自分の方へ賜への意。
○ついで　機會。
○負けわざ　物をかけて勝負する事。

またある人の許にて、琵琶法師の物語をきかむとて、琵琶を召しよせたるに、柱のひとつ落ちたりしかば、「作りてつけよ。」といふに、ある男の中に、あしからずと見ゆるが、「ふるき柄杓の柄ありや。」などいふを見れば、爪をおふしたり。琵琶など彈くにこそ。めくら法師の琵琶、その沙汰にもおよばぬことなり。道に心えたるよしにやと、かたはらいたかりき。「ひさくの柄は、ひもの木とかやいひて、よからぬものに。」とぞ、或人仰せられし。わかき人は、少しの事もよく見え、わろく見ゆるなり。

〔二百三十三〕　萬の科あらじと思はば、何事にも誠ありて、人を分かず恭しく、言葉すくなからむには如かじ。男女老少みなさる人こそよけれども、殊に若くかたちよき人の、言うるはしきは、忘れがたく思ひつかるゝものなり。よろづのとがは、馴れたるさまに上手めき、所得たるけしきして、人をないがしろにするにあり。

〔二百三十四〕　人の物を問ひたるに、知らずしもあらじ。有りのまゝにいはむはをこがましとにや、心まどはすやうに返り事したる、よからぬ事なり。知りたる事も、猶さだかにと思ひてや問ふらむ。又まことに知らぬ人もなどか無からむ。うらゝかに言ひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなまし。人はいまだ聞き及ばぬことを、わが知りたる儘に、「さても

○柱　琴などの類、絃の下に立て絃を受けるもの、琵琶ではぢうと云ふ。
○ひもの　薄き檜の板を向ひしものを云ふ。
○科　過失。
○人を分かず　人を區別せず。
○言うるはしきは　言葉の丁寧なのは。
○思ひつかるゝ　印象を殘される。
○上手めき　上手を衒ひ、上手ぶり。
○知らずしもあらじ　先方が知らないわけでもあるまい。
○をこがまし　馬鹿らしい。
○心まどはす　先方で理解出來ず迷ふ。
○うらゝか　明瞭。
○おとなしく　穩健に。

○すゞろなる人　用のない人、むやみな人。
○人氣にせかれねば　人の居る樣子に堰きとめられないから
○木精　木魂、老樹の精靈など木石の化生物。
○けしからぬ　多年の習慣で惡樣なの意に用ゐて居る。
○虛空　中のからなもの。
○念々　種々の考へ。
○出雲　丹波の地名　そこに同名の國幣中社がある。
○大社　出雲大社。
○しる所　領する所
○聖海上人　不明尊
○いざたまへ　さあおいでなさい。
○獅子狛犬　社前なる獅麗ほらひの裝飾

その人の事の淺ましき。」などばかり言ひやりたれば、いかなる事のあるにかと推し返し問ひにやるこそ、こゝろづきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらす事もあれば、覺束なからぬやうに告げやりたらむ、惡しかるべきことかは。かやうの事は、ものなれぬ人のあることなり。

〔二百三十五〕　主ある家には。すゞろなる人、心の儘に入り來る事なし。主なき所には道行人みだりに立ち入り、狐梟やうの者も、人氣にせかれねば、所得顏に入り住み、木精などいふけしからぬ形もあらはるゝものなり。また鏡には、色形なき故に、よろづの影きたりてうつる。鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虛空よくものを容る。われらが心に、念々のほしきまゝにきたり浮ぶも、心といふものの無きにやあらむ。心にぬしあらましかば、胸のうちに若干のことは入りきたらざらまし。

〔二百三十六〕　丹波に出雲といふ所あり。大社を遷して、めでたく造れり。志太の某とかやしる所なれば、秋の頃、聖海上人、その外も人數多誘ひて、「いざたまへ、出雲拜みに。かいもちひ召させむ。」とて、具しもていきたるに、おの〳〵拜みて、ゆゝしく信起したり。御前なる獅子狛犬、そむきて後ざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子の立ちやういと珍し。深き故あらむ。」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じとがめずや。無下なり。」といへば、おの〳〵あやしみて、「まことに他に異なりけり、都のつとにかたらむ。」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顏したる神官をよびて、「この御社の獅子の立てられやう、定めてならひあることにはべらむ。ちと承らばや。」といはれければ、「そのことに候。さがなき童どもの仕りける、奇怪に候ことなり。」とて、さし寄りてする直して往にければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

〔二百三十七〕　やない筥にすうるものは、縱ざま横ざま、物によるべきにや。「卷物などは縱ざまにおきて、木のあはひより、紙捻りを通して結ひつく。硯も縱ざまにおきたる、筆ころばずよし。」と三條右大臣殿おほせられき。勘解由小路の家の能書の人々は、假にも縱ざまにおかるゝことなし、必ず横ざまにするゑられ侍りき。

〔二百三十八〕　御隨身近友が自讃とて、七箇條かきとゞめたる事あり。みな馬藝させることなき事どもなり。その例をおもひて、自讃のこと七つあり。

一、人あまた連れて花見ありきしに、最勝光院の邊にて、男の馬を走らしむるを見て、

○つと　土産。
○やない筥　柳の木の三角形の細木を編み合せた筥、後世はその編み合せたものに足をつけた机形。
○縱ざま横ざま　細木の並びに置くのが縱、之に反するが横
○紙捻り　かうより
○三條右大臣　不明
○勘解由の小路の家　藤原行成の子孫で世尊寺と云ふ書道を以て立つた家。
○近友　傳不明。
○自讃　自分自身をほめる事。
○最勝光院　京都の東の郊外、南禪寺内にあつた寺。

○當代　後醍醐帝。
○坊　東宮坊こゝでは皇太子を意味する
○堀河大納言　藤原師信、師繼の子、當時東宮大夫。
○育司　育子とも書く、部屋。
○紫の云々　論語に「惡二紫之奪一レ朱也」小人が賢者を顚倒する喩へ。
○定家　藤原定家、俊成の子、新古今の撰者。
○秋の野云々　古今集の在原棟梁の作。
○本歌　典據となる原歌。
○驚悟す　記憶する
○道の冥加　歌道の名譽。
○款狀　志願の申文

「今一度馬を馳するものならば、馬倒れて落つべし、しばし見給へ。」とて立ちどまりたるに、また馬を馳す。とゞむる所にて、馬を引きたふして、乘れる人泥土の中にころび入る。その詞のあやまらざることを、人みな感ず。

一、當代いまだ坊におはしましし、ころ、萬里小路殿御所なりしに、堀河大納言殿伺候し給ひし御育司へ、用ありて參りたりしに、論語の四五六の卷をくりひろけ給ひて、「たゞ今御所にて、紫の朱うばふ事を惡むといふ文を、御覽ぜられたき事ありて、御本を御覽ずれども、御覽じ出されぬなり。なほよくひき見よと仰せ事にて、求むるなり。」と仰せらるゝに、「九の卷のそこ〳〵の程に侍る。」と申したりしかば、「あなうれし。」とて、もてまゐらせ給ひき。かほどの事は、兒どもも常のことなれど、昔の人は、いさゝかの事をもいみじく自讃したるなり。後鳥羽院の御歌に、「袖と袂と一首の中にあしかりなむや。」と、定家卿に尋ね仰せられたるに、

　秋の野の草のたもとか花すゝきほに出でて招く袖と見ゆらむ

と侍れば、何事かさふらふべきと申されたることも、「時にあたりて本歌を覺悟す、道の冥加なり、高運なり。」など、こと〴〵しく記しおかれ侍るなり。九條相國伊通公の款狀にも、ことなる事なき題目をも書きのせて、自讃せられたり。

○常在光院　相國寺の末寺、東山附近。
○在衆　菅原在衆、在嗣の子。
○草　草稿、草案。
○行房　藤原行房、行成の子孫、能書家。
○寒行の入道　鑄鐘を司る僧、人は不明。
○陽唐の韻云々　句の終りの字が平音陽唐の韻で出來て居るのに里ミ云ふ仄音紙韻の韻が用ゐてあるから咎めたのだ。
○三塔　比叡山の東塔、西塔、橫川を云ふ。
○常行堂　常行三昧を修する堂。
○佐理行成　藤原佐理、敦敏の子、能書家、行成は前に出た。
○位署　官位姓名の書いてある事。
○八災　八つの修行得道の障ひとなるもの、憂苦、喜樂、孚何、出息、入息。

一、常在光院の撞鐘の銘は、在兼卿の草なり。行房朝臣淸書して、鑄型にうつさせむとせしに、奉行の入道かの草をとり出でて見せ侍りしに、「花の外に夕をおくれば聲百里に聞ゆ。」といふ句あり。「陽唐の韻と見ゆるに、百里あやまりか。」と申したりしを、「よくぞ見せ奉りける。おのれが高名なり。」とて、筆者の許へいひやりたるに、「あやまり侍りけり。數行となほさるべし。」と返り事はべりき。「數行。」もいかなるべきにか、もし「數歩」の意か、おほつかなし。

一、人あまた伴ひて、三塔巡禮の事侍りしに、橫川の常行堂の中、龍華院と書けるふるき額あり。「佐理行成の間うたがひありて、いまだ決せずと申し傳へたり。」と堂僧ことごとしく申し侍りしを、「行成ならば裏書あるべし。佐理ならば裏書あるべからず。」といひたりしに、裏は塵つもり、蟲の巢にていぶせげなるを、よく掃き拭ひて、おの〳〵見侍りしに、行成位署名字年號さだかに見え侍りしかば、人みな興に入る。

一、那蘭陀寺にて、道眼ひじり談義せしに、八災といふ事を忘れて、「誰かおぼえ給ふ。」といひしを、所化みな覺えざりしに、屋のうちより、「これ〳〵にや。」といひ出したれば、

○賢助　藤原公守の子、醍醐院座主。
○加持香水　眞言宗で行ふ呪法の一、ここでは正月八日から十五日まで行はるゝ宮中の法事。
○陣　宮中諸官院の外陣、護衛兵の居所。
○やがて　直に。
○千本の寺　大報恩寺、前出。
○優なる　優美な。
○便あし　具合が悪い。
○すり退き　外してのく。
○そゞろごと　雑談
○色なき　色氣のない。
○見おとし　軽蔑する。
○便よくは　都合よくは。

いみじく感じ侍りき。

一、賢助僧正に伴ひて、加持香水を見はべりしに、いまだ果てぬほどに、僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都見えず。法師どもをかへして求めさするに、「おなじさまなる大衆多くて、えもとめあはず。」といひて、いと久しくて出でたりしを、「あなわびし。それもとめておはせよ。」といはれしに、かへり入りて、やがて具していでぬ。

一、二月十五日、月あかき夜、うち更けて千本の寺にまうでて、後より入りて、一人顔深くかくして聽聞し侍りしに、優なる女の、すがた匂ひ人よりことなるが、わけ入りて膝にゐかかれば、にほひなどもうつるばかりなれば、便あしと思ひてすり退きたるに、なほ居寄りて、おなじさまなれば立ちぬ。その後、ある御所ざまのふるき女房の、そゞろごと言はれし序に、「無下に色なき人におはしけりと、見おとし奉ることなむありし。情なしと恨み奉る人なむある。」と宣ひ出したるに、「更にこそ心得はべらね。」と申して止みぬ。この事後に聞き侍りしは、かの聽聞の夜、御局のうちより、人の御覽じ知りて、さぶらふ女房をつくり立てて、出し給ひて、「便よくばことばなどかけむものぞ。そのありさま参りて申せ、興あらむ。」とてはかり給ひけるとぞ。

○裏宿　二十八宿の一、天を二十八に分つたその西方の一を云ふ、毎日を二十八宿に當てはめてある
○しのぶの浦　岩代倚尖郡の國。
○みるめ　海松と布共に海の植物、しのぶを人目を忍ぶとかけ、之を人の見る目とかけたのだ。
○くらぶの山　山城の時部山、暗路とかけた。
○守る人　山番の驛舎の番人にかけた。
○しひからむ　多かちうと樹木の茂りにかけた。
○まほゆかりぬべし　心恥しからうと云ふ意。

〔二百三十九〕　八月十五日九月十三日は裏宿なり。この宿、清明なる故に、月をもてあそぶに良夜とす。

〔二百四十〕　しのぶの浦の蜑のみるめも所狭く、くらぶの山も守る人しげからむに、わりなく通はむ心の色こそ、淺からずあはれと思ふふしぶしの、忘れがたき事も多からめ。親はらからゆるして、ひたぶるに迎へすゑたらむ、いとまばゆかりぬべし。世にありわぶる女の、似げなき老法師、怪しの東人なりとも、賬ははしきにつきて、「さそふ水あらば。」などいふを、なか人いづかたも心にくきさまにいひなして、知られずしらぬ人を迎へもて來らむあいなさよ。何事をかうち出づる言の葉にせむ。年月のつらさをも、分けこしは山のなどもあひかたらはむこそ、つきせぬ言の葉にてもあらめ。すべてよその人のとりまかなひたらむ、うたて心づきなき事多かるべし。よき女ならむにつけても、品くだり、みにくく、年も長けなむ男は、「かく怪しき身のために、あたら身をいたづらになさむやは。」と、人も心劣りせられ、わが身はむかひ居たらむも、影はづかしくおぼえなむ、いとこそあいなからめ。梅の花かうばしき夜の朧月にたゝずみ、御垣が原の露分け出でむありあけの空も、わが身ざまに忍ばるべくもなからむ人は、たゞ色好まざらむにはしかじ。

○さそふ水云々　文屋康秀が小野小町を東国に誘つた時、小町の歌「わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞおもふ」古今集。
○知られずしらぬ　「うとくなる人を何しに親ひらむ知らず知られぬ折もありしに」新古今集。
○分けこしは山云々　「沉設山は山しひ山しひけれど思ひ入るにはさはらざりけり」新古今集。
○御垣が原　禁中の御垣殿近。

〔二百四十一〕　望月の圓なる事は、暫くも住せず、やがて虧けぬ。心とゞめぬ人は、一夜の中に、さまで變る樣も見えぬにやあらむ。病のおもるも、住する隙なくして、死期すでに近し。されども、いまだ病急ならず、死に赴かざる程は、常住平生の念にならひて、生の中に多くの事を成じて後、しづかに道を修せむと思ふ程に、病をうけて死門に臨む時、所願一事も成ぜず、いふかひなくて、年月の懈怠を悔いて、この度もしたち直りて、命を全くせば、夜を日につぎて、この事かの事怠らず成じてむと、願ひをおこすらめど、やがて、重りぬれば、われにもあらずとり亂して果てぬ。この類のみこそあらめ。この事まづ人々急ぎ心におくべし。所願を成じてのち、いとまありて道にむかはむとせば、所願盡くべからず。如幻の生の中に、何事をかなさむ。すべて所願皆妄想なり。所願心にきたらば、妄心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直ちに萬事を放下して道に向ふとき、さはりなく、所作なくて、心身ながくしづかなり。

〔二百四十二〕　とこしなへに、違順につかはるゝ事は、偏に苦樂の爲なり。樂といふは好み愛する事なり。これを求むる事止む時無し。樂欲するところ、一には名なり。名に二種あり。行跡と才藝とのほまれなり。二には色欲、三には味ひなり。萬の願ひ、この三には如かず。これ顚倒の相より起りて、若干の煩ひあり。求めざらむには如かじ。

○顚倒　顚倒見或は顚倒の妄見と云ふ、此の世の無常を常と誤り、苦を樂と、無我を我と、不淨を淨と誤る人間の妄見。

〔二百四十三〕　八つになりし年、父に問ひていはく、「佛はいかなるものにか候らむ。」といふ。父がいはく、「佛には人のなりたるなり。」と。また問ふ、「人は何として佛にはなり候やらむ。」と、父また、「佛のをしへによりてなるなり。」とこたふ。また問ふ、「教へ候ひける佛をば、何がをしへ候ひける。」と。また答ふ、「それもまた、さきの佛のをしへによりてなり給ふなり。」と。又問ふ、「その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける。」といふとき、父、「空よりや降りけむ、土よりやわきけむ。」といひて笑ふ。「問ひつめられて答へずなり侍りつ。」と諸人にかたりて興じき。

○父　愛好の父、ト部兼顯、治部少輔。

昭和四年三月二十三日印刷
昭和四年五月廿六日發行

校註徒然草全（定價八十錢）

校註者　東京府下目黑町上目黑宿山一四四〇番地　山崎麓

發行者　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番　二一八八番　三六八六番
振替東京五二二九八番

不許複製

東京女子高等師範教授校　佐伯常麿先生校註　註　古事記全　原文及び假名混文　定價一圓四十錢　送料十八錢

日本女子大學教授校　石川佐久太郎先生校註　註　竹取物語全　定價三十錢　送料四錢

東京女子高等師範教授校　佐伯常麿先生校註　註　大和物語全　定價七十錢　送料六錢

東京女子高等師範教授校　金子彦二郎先生校註　註　堤中納言物語全　定價五十錢　送料四錢

東京帝大助教授校　植松安先生校註　註　土佐日記全　定價三十錢　送料四錢

日本女子大學教授校　石川佐久太郎先生校註　註　蜻蛉日記全　定價一圓　送料六錢

東洋大學教授校　長連恒先生校註　註　紫式部日記全　定價五十錢　送料四錢

東京高等師範教授校　玉井幸助先生校註　註　更級日記全　定價五十錢　送料四錢

國學院大學教授校　山崎麓先生校註　註　徒然草全　定價八十錢　送料六錢

同　註校　方丈記全　附彰考館本方丈記　定價三十錢　送料四錢

東京女子高等師範教授校　佐伯常麿先生校註　註　平家物語全　定價二圓　送料十八錢

東京女子高等師範教授校　金子彦二郎先生校註　註　落窪物語全　定價一圓二十錢　送料八錢

中央大學教授
沼波守先生校註　源氏物語一　自桐壺　至明石　定價一圓四十錢　送料十八錢

同　校註　源氏物語二　自澪標　至藤裏葉　定價一圓五十錢　送料十八錢

同　校註　源氏物語三　自若菜　至雲隱　定價一圓四十錢　送料十八錢

同　校註　源氏物語四　自匂宮　至夢浮橋　定價一圓七十錢　送料十八錢

日本女子大學教授
石川佐久太郎先生校註　大鏡全　定價一圓三十錢　送料十八錢

同　校註　增鏡全　定價一圓三十錢　送料十八錢

319
726

終